

A Survey of Representatives of Japanese Firms Overseas

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗田, 靖之, 八村, 広三郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004502

海外駐在員の生活と意識調査報告

栗田 靖之* 八村 廣三郎**

A Survey of Representatives of Japanese Firms Overseas

Yasuyuki KURITA, Kozaburo HACHIMURA

This survey was conducted by members of the National Museum of Ethnology's project on "Cultural Change among Japanese," in cooperation with JETRO, the Japan External Trade Organization. A questionnaire was used to survey Japanese 289 couples, with school-aged children, living in 22 cities overseas.

The main results of the survey were: First, that an overwhelming majority of the representatives and their families kept company with other Japanese in their daily life, regardless of where they lived; second, most were concerned about the education of their children, on returning to Japan; and third, almost all respondents recognized that life in Japan was very convenient, whereas that abroad was inconvenient. In cities where they lack what they considered to be basic facilities, equipment, and decent accommodation they considered life a hardship.

Other points noted by survey respondents were that in all cities they thought that the Japanese were more industrious in their outlook than the local population; but on the other hand they considered Japan to be inferior with respect to family ties, public morals, city planning and other aspect of the "quality of life."

Most respondents living temporarily in cities in Europe and United States of America expected that they should adapt themselves to the local culture, whereas those in developing countries of Asia and Africa replied that they should not do so.

In our opinion the results of the survey reflect the school- and career-oriented society of Japan. And also most representatives of Japanese firms abroad exhibited the deep-rooted Japanese tendency of favoring Europe and the United States of America over Asian and African nations.

* 国立民族学博物館第2研究部

** 国立民族学博物館第5研究部

I. 海外駐在員を調査する理由	3. 第3グループ：赴任地における日本人 同士のつき合い
II. 調査の基本仮説	
III. 調査対象者と実施時期および質問紙の構成	4. 第4グループ：子供の教育 5. 第5グループ：赴任地での住み心地 6. 第6グループ：駐在員の心情
1. 第1グループ：社会的属性	
2. 第2グループ：現地社会との接触の程度	N. 全体の考察

I. 海外駐在員を調査する理由

海外における日本人の文化接触を問題にすると、過去の研究の多くは海外に移住した人びとをその対象とすることが多かった。永住した人びとが、どのように現地文化と接触し同化していったかを調査し研究した報告書は多い。

しかし、今日ほど広範囲に国民が海外に出かけている時代には、日本人の異なる文化のもとでの体験を、移住した人びとに限定して研究することは、適当ではないと思われる。その理由のひとつは、移住しようとする人びとは、日本社会から離脱することを決意した人たちであると考えられる点である。

過去の海外移住者の中には、海外において就労し、やがては日本に帰国することを夢みつつも、子供の成長や現地における生活基盤の確立によって、帰国を断念した人も多い。しかし、このような人びとも、人生のある時期で、現地社会に永住する決意をした時があるはずである。

これに対して、現在の海外駐在員になる人びとは、違った事情がある。移住した人びとが、日本からの離脱を、主体的に決断する時があるのに対して、海外駐在員は、海外勤務を希望する者もあるが、会社からの要請によって海外勤務を命じられることが多い。そして、移住者とは決定的に異なる一点は、現地社会に対して、永住しようという意志を持ち合わせていないという点である。

かれらの海外における勤務は、あくまで社命によるものであり、駐在員が現地社会に住みたいという希望があるか否かは、問題とならない点である。

過去において移住した人びとには、農業従事者が多かった。かれらは、自分の将来を考えて、ある種の決意のもとに海外移住の道を選んだ。しかし、今日、海外駐在員になるかどうかは、もっと日常的なことになりつつある。たしかにかつては、海外駐在員になるということは、会社の中でのエリートであったり、語学力のすぐれた、あらかじめそのようなコースを歩むことが期待された人びとの問題であった。しかし、

今日では、サラリーマンにとって転勤が、さけてとおれないことであるように、出身大学や職種にかかわらず、ごく身近なサラリーマンのできごととなっているといわなければならない状況が生じている。ちなみに、現在海外駐在員とその家族は、約18万人といわれている。

第2点は、海外駐在員の終局的な目的は、日本社会における昇進であり、その意味では海外での活躍はつねに日本社会における評価を念頭においてなされている点である。日本の本社からの指揮命令にもとづいて、現地会社および現地従業員を監督して業績を上げる際に、つねに海外駐在員は、日本文化と現地文化の間で、想像以上の苦勞を強いられている。移住した人びとが、自分の内に残っている日本的な心情や文化と、自分をとりまく異文化との葛藤であるのに対して、海外駐在員は、テレックスを通じてもたらされる日本文化と、自分のまわりの異文化とのまさしく調整者としての役割をはたさねばならないのである。このような緊張感が、ときとして、精神的なトラブルを生じている。このような海外における日本人の文化摩擦の結果生じる精神障害は、最近とみに問題となりつつある。そのひとつは、赴任中に駐在員、およびその家族に生じる、現地文化に対する不適應の問題として、また帰国後は、駐在員子弟の日本文化に対する不適應として問題にされている〔星野 1980；稲村 1980〕¹⁾。

しかし、本研究の目的は、これら駐在員を自殺に追い込んだり、あるいは精神障害や神経症をもたらす、駐在員の内的葛藤を問題としようとしているのではない。ここでは、日本人海外駐在員という、多種多様な職種にある今日の平均的日本人が、ごく日常的な生活を通して体験している文化のズレを実証的に調査することを目的としている。

この意味において、過去の海外移住者研究が、農民を中心とした人びとの価値尺度の反映であったのに対して、本研究は、都市生活者の多い海外駐在員の目を通して見た文化比較となるであろう。

Ⅱ．調査の基本仮説

われわれは、海外での調査活動のうちに、多くの日本企業の海外駐在員と接触している。そして、これらの人びととの接触を通じて、日本人が海外で暮していくときの

1) これらの問題に関しては、最近とみに研究者の関心が増大している。異なる文化の間で生じる心理的緊張に関する研究の動向については、次の文献を参考にされたい〔星野 1979；稲村 1979；柏木 1979；箕浦 1979；宮本 1979；清水 1979；詫摩・星野・柏木 1979；渡辺・大塚 1979〕。

困りごとについて、話し合うことが多い。この困りごとの相談自身が、異文化の中で暮していく日本人の文化摩擦の表現であり、この文化摩擦を通じて、影絵のように日本文化の、いかなる側面が特殊なもので、いかなる側面が普遍的であるかを考察するための材料を提供してくれているといえる。

本調査をおこなうに際しては、これらの海外駐在員との接触を通じて得た経験をもとにして、この調査の基本的な分析軸を設定した。そして、以後これらの基本的な分析軸のもとに設定された一連の質問項目をグループとよぶことにする。

さて、第1の分析軸は、海外駐在員の社会的属性についてである。このグループとしては、年齢、性別、出生地、同居の家族、日本に残している子供、現在の赴任地での居住期間、過去10年間の居住地および、最近の一時帰国などを調査の対象項目とした。

第2の軸は、駐在員と現地社会との接触についての調査である。その中でも、大きな問題となるのは、日常生活における言葉である。戦後の日本社会では、英語教育の普及は目ざましいものがある。英語を話せるものの数はたしかに増加した。しかし、日本人は単一言語の中で暮しているので、他言語を話す人たちとコミュニケーションすること自体が、大変気骨の折れることである。この言葉の問題を軸にして、現地の新聞、テレビ、ラジオにどのように接しているかを調査した。

この言葉の悩みに加えて、外国社会でのパーティーの習慣は、家庭パーティーという風習のない日本で育ってきた駐在員とその妻には、新しい経験を強いることになる。このように現地社会との接触の際に生じる問題点をひとまとめにし、これを第2のグループとよぶことにする。

つぎに、駐在員の悩みのひとつは、赴任地における日本人同士のつき合いである。このことは、先の現地社会への接触と、表裏をなす関係といわなければならない。すなわち、現地社会における言葉あるいは生活様式の違いから、ともすれば、日本人同士のつき合いが、大きな意味を持つことになる。赴任地におけるこの日本人社会のつき合いが、狭さゆえに、ときとして、そこで生活していく人たちの大きな負担になることもある。いうなれば、海外駐在員の社会は、異なる文化の中で、日本人同士がお互いにたすけ合って暮していく一面と、また、お互いが近づきすぎることから生じる摩擦という二つの側面が考えられる。このような、日本人同士のつき合いについてを、第3のグループとした。

第4軸は、海外駐在員の子弟の教育問題である。この問題は、駐在員の置かれている立場を、鮮明にもの語っているといえるだろう。すなわち、海外駐在員は、やがて

は日本社会に帰ってくることを前提とした人びとであり、日本社会から離脱しようとは、考えていない。それゆえに、その子弟も、やがて日本社会の中で認められうる教育を受けておく必要がある。いろいろな意味において、日本社会は学歴社会であり、その学歴社会の段階にうまく身を置いておかなければならない。そのために、子弟の教育について、ひとかたならぬ心くばりがおこなわれるのである。第4のグループは、この子弟の教育について調査をおこなう。

つぎに問題となるのは、風俗習慣の異なる文化の中で日本人が暮していくときに感ずる住み心地の問題である。この住み心地は二つの側面が考えられるが、そのひとつは、住居である。日本の厳しい住宅事情から考えると、赴任地によって差はあるが、住宅環境については、日本と較べものにならない条件にめぐまれていることがある。まずはじめに、このような住宅事情について調査をおこなう。

つぎに、日本人の生活を成りたたせているもの[●]の世界について考えてみたい。人びとの文化という概念の中には、つねにその文化を構成しているもの[●]の部分が存在している。いうなれば、文化とは人とも[●]との織りなす系であるといえるだろう。さて海外駐在員とは、この日本文化の中で育った人びとが、突然、日本文化の構成要素の大きな部分である日本的なもの[●]の世界から、身をはがされることを意味している。この日本的なもの[●]の世界は、ただ単に日本食や日本の酒といった日本特有のものだけに限らず、日常的にわれわれが容易に手に入れることのできるものが、われわれの生活から姿を消したとき、日本人はどれほどまでこのもの[●]の世界に執着を示すのかを考えさせてくれる、ある種の実験状況であるともいえるだろう。それゆえ、この第5のグループは、住居や物質文化を中心にした、住み心地についての調査である。

最後に第6の軸として、異なる文化の中で暮していくときの、トータルな意味での駐在員の心情といったものを調査する。

稲村は、海外における日本人の行動を分けて、とくに顕著と思われるものを指摘している [稲村 1979, 1980: 138-160]。それによると、まず第1の行動的特徴は、日本人同士が固まることである。これは駐在員本人が仕事場において固まるだけにとどまらず、その妻たちもまた固まって生活しているという。つぎに指摘される行動的特徴は、優等生的な振舞いである。この傾向は、とくに南アメリカにおいて顕著であるという。このような振舞い自身、ある意味では、日本人が海外において生活していく際の緊張感を示しているのであろう。われわれの調査でも、この二つの指摘、すなわち、日本人同士の集合と緊張感についても、調査項目の中に加えた。

それとともに、駐在員の本音として、かれらが現地文化をどのように見ているのか、

また自分の置かれている状況を、どのように見ているのかを、この第6のグループで明らかにしたいと思う。

Ⅲ. 調査対象者と実施時期および質問紙の構成

この調査における調査回答者は、日本の企業から派遣されている海外駐在員を対象とした。そして、夫婦で滞在していることと、学齢期の子供をもっていることを条件とした。しかし、手違いのため、リオデジャネイロでは主婦の回答が得られなかった。

調査には、日本貿易振興会 (Japan External Trade Organization: JETRO) の海外 PR 部の協力を仰ぎ、22の海外都市においてアンケート用紙を配布した。回答は JETRO の海外事務所を通じておこなった。調査地は、図1に示した。

調査期間は、1979年秋より1980年春までの期間であった。

なお、調査対象者の職種は、商社、メーカー、建設業、サービス業、銀行、運輸、等の分野におよんでいる。

質問紙の構成は、記入者の氏名、年齢、性別、出生地をたずねるとともに、F1においては、同居の家族構成、F2においては、日本に残してきた子供について記入を求めた。このフェース・シート部分につづいて、33の質問項目を配置した。本文で Q 番号であらわされているのは、これらの質問項目である。なお、巻末に資料として調査票を添付した。

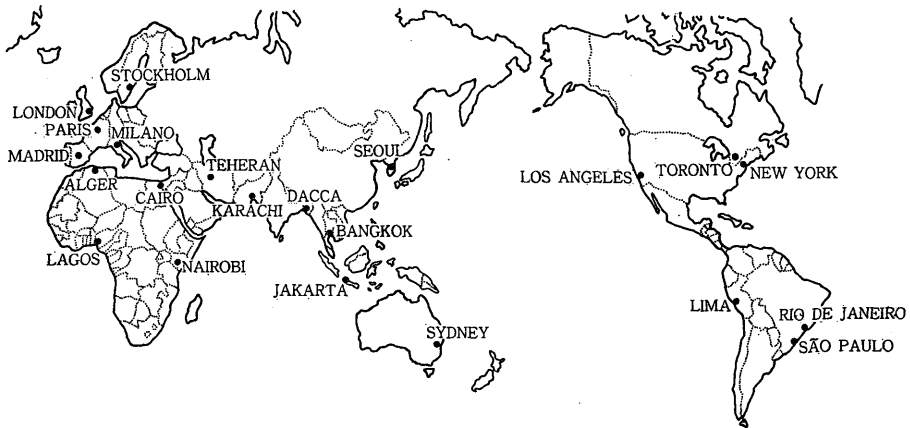


図1 調査地

表1 回答者の年齢構成

年 令	人 数 (%)	年 齢	人 数 (%)
25	1 (0.2)	41	28 (5.4)
26	1 (0.2)	42	31 (6.0)
27	3 (0.6)	43	25 (4.8)
28	3 (0.6)	44	17 (3.3)
29	7 (1.3)	45	16 (3.1)
30	10 (1.9)	46	16 (3.1)
31	9 (1.7)	47	5 (1.0)
32	22 (4.2)	48	3 (0.6)
33	21 (4.0)	49	6 (1.2)
34	17 (3.3)	50	3 (0.6)
35	31 (6.0)	51	2 (0.4)
36	31 (6.0)	52	3 (0.6)
37	34 (6.6)	53	2 (0.4)
38	43 (8.3)	54	1 (0.2)
39	53 (10.2)	不明	36 (6.9)
40	39 (7.5)	計	519 (100.0)

表2 回答者の男女構成比

	男 (%)	女 (%)	性別不明 (%)	小 計
1 SEOUL	18 (54.5)	15 (45.5)	— —	33
2 BANGKOK	18 (50.0)	18 (50.0)	— —	36
3 JAKARTA	11 (39.3)	9 (32.1)	8 (28.6)	28
4 DACCA	3 (50.0)	3 (50.0)	— —	6
5 KARACHI	5 (50.0)	5 (50.0)	— —	10
6 TEHERAN	5 (50.0)	5 (50.0)	— —	10
7 LONDON	18 (66.7)	9 (33.3)	— —	27
8 PARIS	19 (57.6)	14 (42.4)	— —	33
9 MILANO	18 (50.0)	18 (50.0)	— —	36
10 MADRID	10 (50.0)	10 (50.0)	— —	20
11 STOCKHOLM	10 (50.0)	10 (50.0)	— —	20
12 CAIRO	5 (50.0)	5 (50.0)	— —	10
13 ALGER	7 (50.0)	7 (50.0)	— —	14
14 LAGOS	11 (45.8)	13 (54.2)	— —	24
15 NAIROBI	7 (50.0)	7 (50.0)	— —	14
16 TORONTO	18 (52.9)	16 (47.1)	— —	34
17 NEW YORK	21 (61.8)	13 (38.2)	— —	34
18 LOS ANGELES	12 (50.0)	12 (50.0)	— —	24
19 SÃO PAULO	14 (50.0)	14 (50.0)	— —	28
20 RIO DE J.	7 (100.0)	0 (0.0)	— —	7
21 LIMA	22 (56.4)	17 (43.6)	— —	39
22 SYDNEY	16 (50.0)	16 (50.0)	— —	32
計	275 (53.0)	236 (45.5)	8 (1.5)	519

1. 第1グループ：社会的属性

この調査の回答者は、日本企業の海外駐在員とその妻、519人である。

回答者の年齢分布は、表1に示したが、最年少が25才、最年長が54才である。平均年齢は、38.6才であり、39才をモード（最頻度値）としている。

男女構成比は、表2に示したが、男性が275名(53.0パーセント)、女性が236名(45.5パーセント)で、そのほかに、ジャカルタの回答者の中に性別不明者が8名(1.5パーセント)ある。

F1において、同居の家族について記入を求めた。この項目では、夫か妻のいずれかが記入している場合は、その妻または夫が重ねて記入する必要はない、と指示した。その結果から、この調査票に回答した世帯数は、289であると考えられる。

家族構成は、平均4.4人である。

F2においては、日本に残してきた子供について質問した。その結果、12家族、4.2パーセントの家庭で、日本に子供を残して赴任している。

回答者の出身地は、表3に示した。その出身地は、高知県と沖縄県をのぞいたほぼ全国に散らばっている。それとともに、海外駐在員の3.5パーセントの者が、海外で出生した者であることは、注目をひくことである。

Q1において、現在居住している国に来てから、何年になるのか、を質問した。それぞれの都市における回答者の平均居住期間を月数で示したのが、表4の平均居住期間欄である。これによれば、全回答者の現在の居住地における平均居住期間は、33.2カ月である。それぞれの都市の平均居住期間のうち、もっとも長いのが、ダッカの65.8カ月であり、もっとも短い

表3 回答者の出身地

地域	都道府県	度数(%)
北海道	北海道	16 (3.1)
東北	青森・岩手・宮城 秋田・山形・福島	13 (2.5)
関東	茨城・栃木・群馬 埼玉・千葉・東京 神奈川	174 (33.5)
中部信越	新潟・富山・石川 福井・山梨・長野 岐阜・静岡・愛知	58 (11.2)
近畿	三重・滋賀・京都 大阪・兵庫・奈良 和歌山	111 (21.4)
中国	鳥取・島根・岡山 広島・山口	22 (4.2)
四国	徳島・香川・愛媛 高知	12 (2.3)
九州・沖縄	福岡・佐賀・長崎 熊本・大分・宮崎 鹿児島・沖縄	31 (6.0)
海外		18 (3.5)
不明		64 (12.3)
合計		519(100.0)

注：高知県と沖縄県は当該者なし

表4 現在の赴任地における居住期間

都市名	月 数													小 計	平均居住 期間月数
	1~12	13~24	25~36	37~48	49~60	61~72	73~84	85~96	97~108	109~ 120	121~ 132	133~ 144	145カ月以上		
1 SEOUL	11	13	5	3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	33	18.6
2 BANGKOK	4	3	11	13	4	—	—	—	—	—	—	—	—	35	33.6
3 JAKARTA	6	2	6	6	1	—	—	—	—	—	—	—	—	21	27.9
4 DACCA	—	3	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	1(180カ月)	6	65.8
5 KARACHI	2	2	4	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	10	27.6
6 TEHERAN	—	3	2	3	2	—	—	—	—	—	—	—	—	10	36.1
7 LONDON	7	6	6	3	3	1	1	—	—	—	—	—	—	27	28.1
8 PARIS	12	6	3	5	1	3	—	—	—	1	—	—	—	31	28.2
9 MILANO	7	13	3	1	6	4	1	1	—	—	—	—	—	36	33.9
10 MADRID	4	4	—	3	5	1	—	—	—	1	1	—	—	19	40.9
11 STOCKHOLM	2	6	2	2	3	1	4	—	—	—	—	—	—	20	40.5
12 CAIRO	1	6	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	21.6
13 ALGER	3	6	1	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	13	23.7
14 LAGOS	3	7	8	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	23	27.2
15 NAIROBI	1	2	7	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	14	31.0
16 TORONTO	5	8	8	4	2	2	—	—	—	—	1	—	1(173カ月)	31	37.0
17 NEW YORK	1	8	4	6	4	2	3	—	—	—	1	1	—	30	45.3
18 LOS ANGELES	4	5	6	3	6	—	—	—	—	—	—	—	—	24	30.9
19 SÃO PAULO	1	3	8	4	7	2	1	—	—	—	—	—	—	26	41.2
20 RIO DE J.	—	5	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	7	32.4
21 LIMA	7	12	9	5	4	—	2	—	—	—	—	—	—	39	28.9
22 SYNDEY	3	9	4	5	3	—	2	—	1	3	—	—	—	30	43.9
計	84 17.0%	132 26.7%	99 20.0%	75 15.2%	59 11.9%	16 3.2%	15 3.0%	1 0.2%	2 0.4%	5 1.0%	3 0.6%	1 0.2%	2 0.4%	494	全平均 33.2
累積パーセント	17.0%	43.7%	63.8%	78.9%	90.9%	94.1%	97.2%	97.4%	97.8%	98.8%	99.4%	99.6%	100.0%		

栗田・八村 海外駐在員の生活と意識調査報告

表5 この10年間に於ける海外
居住年数の累積

海外居住年数	人数 (%)	累積パーセント
1年未満	38 (7.3)	7.3
1～2年	68 (13.1)	20.4
2～3年	82 (15.8)	36.2
3～4年	80 (15.4)	51.6
4～5年	80 (15.4)	67.1
5～6年	71 (13.7)	80.7
6～7年	42 (8.1)	88.8
7～8年	28 (5.4)	94.2
8～9年	11 (2.1)	96.3
9～10年	12 (2.3)	98.6
10年以上	7 (1.3)	100.0
計	519 (100.0)	

表6 一時帰国の時期 (男性)

年次	人数 (%)
一時帰国せず	117 (42.5)
74年	2 (0.7)
75年	4 (1.5)
76年	3 (1.1)
77年	11 (4.0)
78年	37 (13.5)
79年	100 (36.4)
年次不明	1 (0.4)
計	275 (100.0)

が、アルジェの23.7カ月である。

表4は、それぞれの都市における居住期間を、12カ月ごとで区別し、その度数分布を示したものであるが、これによれば、ダッカには、180カ月(15年)間の滞在者を含んでいることがわかる。この人の存在が、ダッカの平均滞在年数を高めたのであろう。

表4において、駐在年数が0～5年までを累積すると、ほぼ90.9パーセントになる。このことから、ひとつの都市の駐在年数は、ほぼ5年以内程度であることがわかる。

Q2においては、過去10年間の居住地をたずねた。結果の整理においては、この10年間に海外に居住していた期間だけを加算して示したのが表5である。この結果から、過去10年間に5年未満の海外居住をしていた者は、67.1パーセントであった。そして過去10年間ずっと海外に居住していたと答えたものは、1.3パーセントであった。

Q3では、最近、日本に一時帰国した時期、そして滞在期間を質問した。このデータは、男性と女性に区別して集計した。表6は、男性の結果を示したものである。この結果から、最近一時帰国していないと答えたものが、117人あり、これは42.5パーセントにあたる。

表7は女性について集計したものである。この結果から、143人、60.6パーセントのものが一時帰国していないと回答している。この結果を男性のそれと較べると、女性の方が、18.1パーセントも一時帰国したものが少ないことがわかる。この傾向は、男性が社用などで、本社との事務連絡に一時帰国する機会があるのに対して、女性には、そのような機会がめぐまれていないことを示しているのであろう。

表7 一時帰国の時期（女性）

年次	人数 (%)
一時帰国せず	143 (60.6)
74年	1 (0.4)
75年	0 (0.0)
76年	5 (2.1)
77年	9 (3.8)
78年	31 (13.1)
79年	46 (19.5)
年次不明	1 (0.4)
計	236 (100.0)

表8 一時帰国の滞在週数（男性）

期間	人数 (%)
一時帰国せず	117 (42.5)
1週間未満	44 (16.0)
1～2週間	63 (22.9)
2～3週間	22 (8.0)
3～4週間	23 (8.4)
4～5週間	1 (0.4)
5～6週間	2 (0.7)
7～8週間	2 (0.7)
20週間	1 (0.4)
計	275 (100.0)

同じく一時帰国したとき、日本に滞在する期間を、男性について示したのが、表8である。ここでは、一時帰国のおりの滞在期間が週単位で示されているが、およそ1～2週間であることがわかる。

これに対して、同じく日本に一時帰国した際の滞在日数を、女性について示したのが、表9である。これによると、女性の場合は、3～4週間の滞在をするものがモードを示している。

これらの結果から、男性は、しばしば一時帰国するが、その滞在日数は短く、女性は、一時帰国することは少ないが、帰国したときの滞在日数は長いことが示されている。駐在員の妻は、子供の学校にしばられて、なかなか一時帰国できないのが現状であろう。

2. 第2グループ：

現地社会との接触の程度

Q7において、日常用いている言葉を、家庭、近所、事務所と区分して質問した。その結果は、男性・女性の別に集計し、

表9 一時帰国の滞在週数（女性）

期間	人数 (%)
一時帰国せず	143 (60.6)
1週間未満	4 (1.7)
1～2週間	21 (8.9)
2～3週間	17 (7.2)
3～4週間	34 (14.2)
4～5週間	1 (0.4)
5～6週間	4 (1.7)
6～7週間	1 (0.4)
7～8週間	1 (0.4)
10週間	2 (0.8)
24週間	3 (1.3)
28週間	2 (0.8)
31週間	1 (0.4)
32週間	1 (0.4)
期間不明	1 (0.4)
計	236 (100.0)

表10 家庭で使用している言葉 (男性)

1 SEOUL	日 本 語(18)		
2 BANGKOK	日 本 語(18)		
3 JAKARTA	日 本 語(10)	インドネシア語(6)	
4 DACCA	日 本 語(3)	ヒンディー語(6)	英 語(1)
5 KARACHI	日 本 語(5)	英 語(1)	
6 TEHERAN	日 本 語(5)		
7 LONDON	日 本 語(16)	英 語(1)	イタリヤ語(1)
8 PARIS	日 本 語(18)		
9 MILANO	日 本 語(18)		
10 MADRID	日 本 語(10)		
11 STOCKHOLM	日 本 語(10)		
12 CAIRO	日 本 語(5)		
13 ALGER	日 本 語(7)		
14 LAGOS	日 本 語(11)		
15 NAIROBI	日 本 語(7)	スワヒリ語(1)	
16 TORONTO	日 本 語(18)	英 語(1)	
17 NEW YORK	日 本 語(21)		
18 LOS ANGELES	日 本 語(12)		
19 SÃO PAULO	日 本 語(14)		
20 RIO DE J.	日 本 語(7)		
21 LIMA	日 本 語(19)	ス ペ イ ン 語(1)	
22 SYDNEY	日 本 語(16)		

() 内は、その言語を用いていると答えた者の数

表11 近所で使用している言葉 (男性)

1 SEOUL	日 本 語(13)	英 語(3)	韓 国 語(3)
2 BANGKOK	日 本 語(14)	英 語(3)	
3 JAKARTA	日 本 語(5)	インドネシア語(4)	
4 DACCA	日 本 語(2)	英 語(1)	ウルドゥ語(1)
5 KARACHI	英 語(5)		
6 TEHERAN	英 語(3)	ペルシア語(2)	日 本 語(1)
7 LONDON	英 語(15)	日 本 語(3)	
8 PARIS	フ ラ ン ス 語(15)	日 本 語(2)	英 語(2)
9 MILANO	イ タ リ ア 語(17)	日 本 語(2)	英 語(1)
10 MADRID	ス ペ イ ン 語(9)	イ タ リ ア 語(1)	
11 STOCKHOLM	英 語(9)	ス エ ー デ ン 語(1)	
12 CAIRO	日 本 語(3)	英 語(3)	ア ラ ビ ア 語(2)
13 ALGER	フ ラ ン ス 語(5)	日 本 語(1)	
14 LAGOS	日 本 語(9)	英 語(5)	
15 NAIROBI	英 語(7)	日 本 語(3)	
16 TORONTO	英 語(18)	日 本 語(4)	
17 NEW YORK	英 語(18)	日 本 語(9)	
18 LOS ANGELES	英 語(11)	日 本 語(3)	
19 SÃO PAULO	ポ ル ト ガ ル 語(10)	日 本 語(4)	
20 RIO DE J.	日 本 語(4)	ポ ル ト ガ ル 語(3)	
21 LIMA	ス ペ イ ン 語(18)	日 本 語(2)	
22 SYDNEY	英 語(15)		

() 内は、その言語を用いていると答えた者の数

表12 事務所で使用している言葉 (男性)

1 SEOUL	日 本 語 (16)	韓 国 語 (8)	英 (3) 語		
2 BANGKOK	英 (13) 語	タ イ 語 (6)	日 本 語 (6)		
3 JAKARTA	インドネシア語 (6)	英 (6) 語	日 本 語 (1)	中 国 語 (1)	
4 DACCA	英 (2) 語	日 本 語 (1)	タ イ 語 (1)		
5 KARACHI	英 (5) 語	日 本 語 (1)			
6 TEHERAN	英 (5) 語	ペルシア語 (1)			
7 LONDON	日 本 語 (17)	英 (14) 語			
8 PARIS	日 本 語 (8)	英 (8) 語	フランス語 (5)		
9 MILANO	イタリア語 (10)	英 (10) 語	日 本 語 (4)	フランス語 (1)	
10 MADRID	スペイン語 (5)	日 本 語 (5)	英 (2) 語	イタリア語 (1)	ポルトガル語 (1)
11 STOCKHOLM	英 (9) 語	日 本 語 (2)			
12 CAIRO	英 (5) 語	日 本 語 (1)			
13 ALGER	フランス語 (5)	日 本 語 (4)	英 (1) 語		
14 LAGOS	英 (10) 語	日 本 語 (3)	中 国 語 (1)		
15 NAIROBI	英 (6) 語	日 本 語 (2)			
16 TORONTO	英 (15) 語	日 本 語 (8)			
17 NEW YORK	日 本 語 (19)	英 (15) 語			
18 LOS ANGELES	英 (11) 語	日 本 語 (8)			
19 SÃO PAULO	ポルトガル語 (11)	日 本 語 (8)			
20 RIO DE J.	日 本 語 (5)	ポルトガル語 (2)	英 (2) 語		
21 LIMA	スペイン語 (21)	日 本 語 (8)	英 (1) 語		
22 SYDNEY	英 (15) 語	日 本 語 (4)			

() 内は、その言語を用いていると答えた者の数

表13 家庭で使用している言葉（女性）

1 SEOUL	日	本	語(15)	
2 BANGKOK	日	本	語(17)	タ イ 語(3)
3 JAKARTA	日	本	語(9)	インドネシア語(2)
4 DACCA	日	本	語(3)	英 語(2)
5 KARACHI	日	本	語(5)	英 語(2)
6 TEHERAN	日	本	語(5)	
7 LONDON	日	本	語(9)	
8 PARIS	日	本	語(14)	
9 MILANO	日	本	語(18)	
10 MADRID	日	本	語(10)	
11 STOCKHOLM	日	本	語(10)	
12 CAIRO	日	本	語(4)	アラビア語(2)
13 ALGER	日	本	語(7)	
14 LAGOS	日	本	語(13)	英 語(1)
15 NAIROBI	日	本	語(7)	スワヒリ語(1)
16 TORONTO	日	本	語(16)	
17 NEW YORK	日	本	語(13)	
18 LOS ANGELES	日	本	語(12)	
19 SÃO PAULO	日	本	語(14)	
20 RIO DE J.				
21 LIMA	日	本	語(17)	英 語(1)
22 SYDNEY	日	本	語(16)	

()内は、その言語を用いていると答えた者の数

それぞれの結果は、表10から表14に示した。この集計に際しては、使用している言葉を、2つ以上記入した者や、リオデジャネイロのように、女性の回答者がいなかった都市もあるので、単純に、パーセントを求めることができない。全体的な傾向として、家庭内においては、日本語が用いられているが、ジャカルタやダッカなどでは、現地語が用いられている家庭も少なくない。これは、家庭内の使用人に対して、現地語を用いているのであろう。

また、男女とも近隣関係の人びとと、日本語を用いているという回答が多かった。このことは、とりもなおさず、近くに日本人が住んでおり、その人たちとのつき合いが多いことを意味している。とくに、ソウル、バンコク、ラゴスなどでは、男女とも日本人とのつき合いが多いことがうかがわれる。とくに女性の場合、トロント、ニューヨーク、サンパウロでは、日本語の使用頻度が高く、このことから、日本人主婦同士の往来が多いことをもの語っている。

表12より男性が事務所で使用している言語を見ると、南アメリカをのぞいて大半の都市で、英語、日本語が多くつかわれている。ビジネスの世界では、現地語をそれほ

表14 近所で使用している言葉 (女性)

1 SEOUL	日 本 語(11)	韓 国 語(4)	英 語(1)	
2 BANGKOK	日 本 語(16)	英 語(6)	タ イ 語(1)	
3 JAKARTA	インドネシア語(3)	日 本 語(3)		
4 DACCA	日 本 語(2)	英 語(2)		
5 KARACHI	英 語(4)	日 本 語(2)		
6 TEHERAN	ペルシア語(4)	英 語(2)		
7 LONDON	英 語(9)	日 本 語(4)		
8 PARIS	フ ラ ン ス 語(10)	日 本 語(5)	英 語(1)	
9 MILANO	イ タ リ ア 語(15)	日 本 語(7)		
10 MADRID	ス ペ イ ン 語(8)	日 本 語(1)		
11 STOCKHOLM	日 本 語(7)	スウェーデン語(6)	ド イ ツ 語(1)	
12 CAIRO	ア ラ ビ ア 語(2)	日 本 語(2)	英 語(1)	
13 ALGER	フ ラ ン ス 語(4)	ア ラ ビ ア 語(1)	日 本 語(1)	英 語(1)
14 LAGOS	日 本 語(9)	英 語(7)		
15 NAIROBI	英 語(3)	日 本 語(3)		
16 TORONTO	日 本 語(10)	英 語(9)		
17 NEW YORK	英 語(7)	日 本 語(7)		
18 LOS ANGELES	英 語(7)	日 本 語(7)		
19 SÃO PAULO	日 本 語(10)	ポルトガル語(6)		
20 RIO DE J.				
21 LIMA	ス ペ イ ン 語(13)	日 本 語(2)		
22 SYDNEY	英 語(15)			

() 内は、その言語を用いていると答えた者の数

ど用いなくても、英語で大半の事務をすまうことができるのであろう。

Q21 では、日頃の生活において、言葉に不自由しているかどうかを質問した。この回答選択肢は、1.まったく不自由していない、2.不自由していない、3.不自由している、4.まったく不自由している の4つである。結果の整理に際しては、1と2を加えて、「不自由していない」とし、3と4を加えて、「不自由している」とした。そしてこの両者間の有意差検定を示したのが、表15の Q21 欄である²⁾。この結果から、日頃の生活の中で、「言葉に不自由していない」と答えたものが有意に多い都市は、バンコク、テヘラン、マドリード、ニューヨーク、ロサンゼルスであった。

表11, 12, 14から、バンコクについてみると、男女とも近隣の人びとは日本語を用いており、男性は事務所で英語を用いている。ニューヨーク、ロサンゼルスは英語圏であるが、日本語の使用頻度も高いことがわかる。テヘラン、マドリードは表4より

2) 以後の結果の整理において、2つのカテゴリー間に差があるか否かについて、検定をおこなった。標本数が25以下の場合、二項分布による検定をおこない、標本数が26以上の場合、臨界比 (critical ratio: CR) 検定をおこなった。検定の結果、危険率が5パーセント以下の場合、有意差があると認めた [岩原 1955, 1958]。以後は、それぞれの項目に対する反応を、量的なものから質的なものに変換して議論の材料とする。

表15 各項目の有意差検定の結果(その1)

	Q8 日頃のつき 合い	Q9-1 米	Q9-2 味噌	Q9-3 醤油	Q9-4 のり	Q9-5 つけもの	Q9-6 お茶	Q9-7 うめぼし	Q9-8 しいたけ	Q9-9 インスタント ラーメン
	1 非日本人	1 日本から								
	2 有意差 なし	2 有意差 なし								
	3 日本人	3 現地の もの								
1 SEOUL	3	3	1	1	2	2	1	1	3	2
2 BANGKOK	3	3	2	2	1	2	1	1	2	2
3 JAKARTA	3	3	2	1	1	1	1	1	2	2
4 DACCA	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
5 KARACHI	3	2	1	1	1	2	1	2	1	1
6 TEHERAN	3	2	1	1	1	2	1	1	1	2
7 LONDON	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8 PARIS	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1
9 MILANO	3	3	1	1	1	2	1	1	1	1
10 MADRID	3	2	1	2	1	2	1	1	1	1
11 STOCKHOLM	2	1	1	1	1	2	1	1	1	1
12 CAIRO	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1
13 ALGER	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1
14 LAGOS	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1
15 NAIROBI	3	2	1	1	1	2	1	1	1	1
16 TORONTO	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1
17 NEW YORK	3	3	1	2	1	2	1	1	1	2
18 LOS ANGELES	3	3	2	3	1	3	1	2	2	3
19 SÃO PAULO	3	3	3	3	1	3	2	2	1	2
20 RIO DE J.	3	3	3	2	1	2	2	2	2	2
21 LIMA	3	2	3	3	1	3	1	1	1	3
22 SYDNEY	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1

表15 (その2)

	Q9-10 カレー粉	Q9-11 わさび	Q9-12 日本酒	Q9-13 酒のつまみ	Q9-14 おかき	Q9-15 だしのもと	Q9-16 かんぴょう	Q9-17 もち	Q9-18 その他の 日本食	Q9-19 めがね
	1 日本から 2 有意差 3 現地のもの									
1 SEOUL	1	1	2	2	2	1	2	3	1	1
2 BANGKOK	1	1	1	3	2	1	1	3	1	2
3 JAKARTA	2	1	1	2	1	1	1	1	1	2
4 DACCA	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
5 KARACHI	2	2	2	2	1	1	2	1	2	2
6 TEHERAN	2	1	1	2	2	1	1	1	2	2
7 LONDON	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2
8 PARIS	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2
9 MILANO	1	1	2	2	1	1	1	1	1	3
10 MADRID	2	1	2	2	1	1	1	1	1	2
11 STOCKHOLM	2	1	1	2	1	1	1	1	1	2
12 CAIRO	1	1	1	2	1	1	1	1	2	2
13 ALGER	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1
14 LAGOS	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
15 NAIROBI	2	1	1	2	1	1	1	1	1	2
16 TORONTO	2	1	2	2	1	1	1	2	2	3
17 NEW YORK	2	1	2	2	1	1	1	2	2	2
18 LOS ANGLEES	2	2	2	2	3	2	2	3	2	2
19 SÃO PAULO	2	2	3	3	3	2	2	3	3	2
20 RIO DE J.	1	2	2	2	2	2	1	3	2	2
21 LIMA	1	1	1	2	1	1	1	3	2	2
22 SYDNEY	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2

表15 (その3)

	Q9-20 スーツ (男性)	Q9-21 スーツ (女性)	Q9-22 下着(男性)	Q9-23 下着(女性)	Q9-24 靴(紳士)	Q9-25 靴(婦人)	Q9-26 日本の新聞	Q9-27 雑 誌	Q9-28 子供の本	Q9-29 歌謡曲 テープ
1 日本から										
2 有意差										
3 現地のもの										
1 SEOUL	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2 BANGKOK	3	3	1	1	2	3	1	1	1	1
3 JAKARTA	2	2	1	1	1	2	1	1	1	1
4 DACCA	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
5 KARACHI	2	2	2	2	2	2	1	1	1	2
6 TEHERAN	2	2	2	2	2	2	1	2	2	2
7 LONDON	3	3	2	2	3	3	1	1	1	1
8 PARIS	3	3	2	2	3	3	1	1	1	1
9 MILANO	3	3	2	2	3	3	1	1	1	1
10 MADRID	3	2	2	2	3	3	1	1	1	2
11 STOCKHOLM	3	3	2	3	3	3	1	1	1	1
12 CAIRO	2	2	2	2	2	2	1	1	2	2
13 ALGER	1	2	1	1	2	2	1	1	1	1
14 LAGOS	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
15 NAIROBI	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1
16 TORONTO	3	3	2	2	3	3	1	1	1	1
17 NEW YORK	2	2	3	2	3	3	1	1	1	1
18 LOS ANGELES	2	2	2	2	2	3	1	1	2	1
19 SÃO PAULO	2	2	1	1	3	3	1	1	1	1
20 RIO DE J.	2	2	2	2	3	3	2	1	1	2
21 LIMA	2	2	1	1	2	2	1	1	1	1
22 SYDNEY	2	2	2	2	3	3	1	1	1	1

表15 (その4)

	Q 9-30 ビデオ テープ	Q 9-31 赤ちゃん 用品	Q 9-32 台所用品	Q 9-33 くすり	Q 9-34 自動車	Q 9-35 冷蔵庫	Q 9-36 洗濯機	Q 9-37 TV・ ラジオ	Q 9-38 ステレオ	Q 9-39 掃除機
	1 日本から									
	2 有意差									
	3 なし									
	3 現地の もの									
1 SEOUL	1	2	2	1	2	2	2	2	1	1
2 BANGKOK	1	2	3	2	2	3	1	2	2	2
3 JAKARTA	1	2	2	2	3	3	2	3	2	2
4 DACCA	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
5 KARACHI	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
6 TEHERAN	2	2	2	2	2	3	3	2	2	3
7 LONDON	2	2	3	2	3	3	3	3	2	3
8 PARIS	2	2	3	1	3	3	3	3	2	2
9 MILANO	2	2	3	2	3	3	3	3	3	3
10 MADRID	2	2	3	2	3	3	3	2	2	2
11 STOCKHOLM	1	2	3	2	3	3	3	3	2	3
12 CAIRO	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
13 ALGER	2	2	2	1	2	2	2	2	1	2
14 LAGOS	1	2	2	1	3	3	2	2	2	2
15 NAIROBI	2	2	2	1	2	3	2	2	2	2
16 TORONTO	1	2	3	2	3	3	3	3	2	3
17 NEW YORK	1	2	3	2	3	3	3	3	3	3
18 LOS ANGELES	1	2	3	2	3	3	3	3	3	3
19 SÃO PAULO	2	2	3	2	3	3	3	3	2	2
20 RIO DE J.	2	2	3	2	3	3	3	3	2	2
21 LIMA	1	1	2	2	3	3	2	2	2	2
22 SYDNEY	2	2	3	2	3	3	3	3	2	3

表15 (その5)

	Q9-40 化粧品	Q9-41 生理用品	Q9-42 避妊具	Q11-1 西洋便所	Q11-2 飲み水	Q11-3 西洋風呂	Q11-4 住まいの 広さ	Q11-5 住まいの 設備	Q11-6 住まいの 間取	Q11-7 ベッド
	1 日本から 2 有意差 なし 3 現地の もの			1 不便なし 2 有意差 なし 3 不便						
1 SEOUL	1	2	1	1	3	1	2	2	1	1
2 BANGKOK	2	2	2	1	2	1	1	2	1	1
3 JAKARTA	2	2	2	1	2	1	1	2	1	1
4 DACCA	2	2	2	1	2	2	1	2	1	1
5 KARACHI	1	2	2	1	3	1	1	2	2	1
6 TEHERAN	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1
7 LONDON	2	3	2	1	1	1	1	2	1	1
8 PARIS	2	3	2	1	2	1	1	2	1	1
9 MILANO	3	3	2	1	2	1	1	1	1	1
10 MADRID	3	3	1	1	1	1	1	2	1	1
11 STOCKHOLM	3	3	2	1	1	1	1	1	1	1
12 CAIRO	2	2	2	1	2	1	1	2	2	1
13 ALGER	1	1	1	1	3	1	2	2	2	1
14 LAGOS	1	2	1	1	3	1	1	2	1	1
15 NAIROBI	2	2	2	1	1	1	1	2	1	1
16 TORONTO	3	3	2	1	1	1	1	1	1	1
17 NEW YORK	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1
18 LOS ANGELES	2	3	2	1	1	1	1	1	1	1
19 SÃO PAULO	2	3	2	1	2	1	1	1	1	1
20 RIO DE J.	2	2	2	1	2	1	1	2	2	1
21 LIMA	2	3	1	1	2	1	1	2	1	1
22 SYDNEY	3	3	2	1	1	1	1	1	1	1

表15 (その6)

	Q 11-8 椅子の生活	Q 11-9 室内での靴	Q 11-10 電化製品 の入手	Q 11-11 収納・押入	Q 11-12 家 賃	Q 12 家主との 関係	Q 13 現地の人と のつき合い	Q 14 近くに日 本人は	Q 15 日本人との つき合い	Q 16 日本人会
	1 不便なし 2 有意差 なし 3 不 便				1 安 い 2 有意差 なし 3 高 い	1 良 い 2 有意差 なし 3 わずらわ しい	1 楽 しい 2 有意差 なし 3 わずらわ しい	1 多 い 2 有意差 なし 3 い ない	1 つき合い たい 2 有意差 なし 3 つき合い たくない	1 参 加 2 有意差 なし 3 不 参加
1 SEOUL	1	1	3	2	3	2	1	1	1	1
2 BANGKOK	1	2	2	2	3	2	1	1	1	1
3 JAKARTA	1	1	1	1	3	1	2	1	2	1
4 DACCA	1	1	3	2	2	1	2	2	1	1
5 KARACHI	1	1	2	2	2	2	2	2	2	1
6 TEHERAN	1	1	1	1	2	2	2	2	2	1
7 LONDON	1	1	1	2	3	1	1	2	1	2
8 PARIS	1	2	2	2	3	1	2	1	1	1
9 MILANO	1	1	1	2	2	1	1	2	2	1
10 MADRID	1	1	2	2	3	2	1	2	1	1
11 STOCKHOLM	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1
12 CAIRO	1	1	2	2	3	2	2	1	2	1
13 ALGER	1	2	3	3	3	1	2	3	1	1
14 LAGOS	1	1	2	1	3	2	2	1	1	1
15 NAIROBI	1	1	3	2	3	2	2	2	1	1
16 TORONTO	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1
17 NEW YORK	1	1	1	1	3	1	1	1	1	2
18 LOS ANGELES	1	1	1	1	3	1	1	1	2	2
19 SÃO PAULO	1	1	2	2	3	1	1	2	2	3
20 RIO DE J.	1	2	2	2	2	1	2	2	2	2
21 LIMA	1	1	2	1	2	1	1	2	1	1
22 SYDNEY	1	1	1	1	3	1	1	2	1	1

表15 (その7)

	Q17 大使館の 集り	Q18 日本から の客	Q19 パーティー	Q20 同僚との つき合い	Q21 日常言語	Q22 現地語の 新聞	Q23 現地のTV ・ラジオ	Q24 緊張感	Q27 子供の結婚	Q28 海外での 教育
	1参加 2有意差 なし 3不参加	1楽しい 2有意差 なし 3わずらわ しい	1楽しい 2有意差 なし 3わずらわ しい	1大切 2有意差 なし 3大切では ない	1不自由な し 2有意差 なし 3不自 由	1読む 2有意差 なし 3読まない	1見る 2有意差 なし 3見ない	1緊張して いる 2有意差 なし 3緊張せず	1こだわら ない 2有意差 なし 3こだわる	1不利 2有意差 なし 3そう思わ ない
1 SEOUL	2	2	1	1	2	1	1	2	3	3
2 BANGKOK	2	2	1	1	1	3	2	2	3	3
3 JAKARTA	3	2	1	2	2	2	2	2	2	3
4 DACCA	1	2	2	1	2	2	2	2	3	2
5 KARACHI	1	2	2	1	2	2	3	2	3	2
6 TEHERAN	2	1	2	1	1	2	2	2	2	2
7 LONDON	2	2	1	1	2	1	1	2	3	2
8 PARIS	2	2	1	1	3	2	1	2	2	3
9 MILANO	2	2	1	1	2	2	1	2	3	2
10 MADRID	1	2	1	1	1	2	1	2	2	3
11 STOCKHOLM	1	1	1	1	2	2	1	3	2	3
12 CAIRO	1	2	2	1	2	2	2	2	3	2
13 ALGER	1	2	2	1	2	2	2	2	3	2
14 LAGOS	1	1	1	1	2	2	3	1	3	2
15 NAIROBI	1	1	2	1	2	2	1	2	2	2
16 TORONTO	1	1	1	1	2	1	1	3	2	2
17 NEW YORK	3	2	1	1	1	1	1	2	3	2
18 LOS ANGELES	3	2	1	1	1	1	1	2	2	2
19 SÃO PAULO	3	2	1	1	2	2	1	2	2	3
20 RIO DE J.	2	2	2	1	2	1	1	2	2	2
21 LIMA	1	2	2	1	2	2	1	2	3	2
22 SYDNEY	2	2	1	1	2	1	1	3	2	2

表15 (その8)

	Q 29 塾	Q 30-1 公衆道徳	Q 30-2 消費生活	Q 30-3 家族のむす びつき	Q 30-4 性風俗	Q 30-5 若い人の しつけ	Q 30-6 町の清潔さ	Q 30-7 政治的安定	Q 30-8 治安	Q 30-9 気候
	1 必要 2 有意差 なし 3 不必要	1 日本の方がよい 2 有意差 なし 3 この国の方がよい								
1 SEOUL	2	1	1	3	2	2	1	1	2	1
2 BANGKOK	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1
3 JAKARTA	3	2	1	3	2	2	1	1	1	1
4 DACCA	3	1	2	2	2	2	1	1	2	1
5 KARACHI	2	1	1	2	2	1	1	1	1	1
6 TEHERAN	2	1	1	2	2	1	1	1	2	3
7 LONDON	2	3	1	2	1	2	2	2	2	1
8 PARIS	3	2	2	2	2	3	2	2	1	2
9 MILANO	3	1	2	3	2	2	1	1	1	2
10 MADRID	2	2	1	2	2	2	2	1	1	3
11 STOCKHOLM	3	3	1	1	2	1	3	3	2	1
12 CAIRO	2	1	1	2	2	1	1	1	2	2
13 ALGER	2	1	1	2	2	1	1	1	1	3
14 LAGOS	3	1	1	2	1	1	1	1	1	1
15 NAIROBI	2	1	1	2	1	1	1	1	1	3
16 TORONTO	2	3	2	1	2	2	3	2	3	1
17 NEW YORK	2	2	3	1	1	2	2	3	1	2
18 LOS ANGELES	3	3	3	2	2	2	3	2	1	3
19 SÃO PAULO	2	1	1	3	2	1	1	1	1	3
20 RIO DE J.	2	1	1	2	2	2	1	2	1	2
21 LIMA	2	1	1	2	1	1	1	1	1	2
22 SYDNEY	2	3	1	2	2	3	3	3	3	3

表15 (その9)

	Q30-10 生活の便 利さ	Q30-11 教育環境	Q30-12 教育水準	Q30-13 金銭観	Q30-14 労働態度	Q30-15 約束を守る	Q30-16 親切心	Q30-17 運転マナー	Q30-18 電話の便 利さ	Q30-19 医療保健 制度
	1 日本の方がよい									
	2 有意差なし									
	3 この国の方がよい									
1 SEOUL	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2 BANGKOK	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1
3 JAKARTA	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1
4 DACCA	1	1	1	2	1	1	2	1	1	2
5 KARACHI	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6 TEHERAN	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1
7 LONDON	1	2	1	2	1	1	3	3	1	3
8 PARIS	2	3	1	3	1	1	1	1	1	2
9 MILANO	1	1	1	2	1	1	2	1	1	2
10 MADRID	2	1	1	1	1	1	2	2	1	1
11 STOCKHOLM	2	2	1	2	1	2	2	3	2	3
12 CAIRO	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1
13 ALGER	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1
14 LAGOS	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
15 NAIROBI	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1
16 TORONTO	2	3	1	2	1	2	2	3	3	3
17 NEW YORK	3	2	1	3	1	2	3	3	3	2
18 LOS ANGELES	3	3	1	3	1	2	3	3	2	2
19 SÃO PAULO	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1
20 RIO DE J.	1	1	1	2	1	1	2	1	1	1
21 LIMA	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1
22 SYDNEY	1	2	1	2	1	2	3	3	1	3

表15 (その10)

	Q30-20 接客態度	Q30-21 正札販売	Q30-22 買いやすさ	Q30-23 文化施設	Q30-24 都市交通	Q30-25 チップ	Q30-26 町並	Q30-27 公園・自然	Q31 駐在員としての誇り	Q32 現地への同化	Q33 今後5年間
	1 日本の方がよい 2 有意差なし 3 この国の方がよい								1 誇りに思う 2 有意差なし 3 誇りに思わない	1 同化賛成 2 有意差なし 3 同化反対	1 居たい 2 有意差なし 3 居たくはない
1 SEOUL	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2	3
2 BANGKOK	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2	3
3 JAKARTA	2	1	1	1	1	1	2	2	3	2	2
4 DACCA	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	3
5 KARACHI	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	3
6 TEHERAN	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	3
7 LONDON	1	2	1	3	2	1	3	3	2	1	2
8 PARIS	1	2	1	3	3	1	3	3	2	1	2
9 MILANO	1	1	1	2	1	1	3	3	2	1	2
10 MADRID	1	2	1	2	1	1	3	3	2	2	2
11 STOCKHOLM	1	2	1	3	2	1	3	3	2	2	3
12 CAIRO	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2	3
13 ALGER	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2	3
14 LAGOS	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2	3
15 NAIROBI	1	1	1	1	1	1	2	3	3	2	3
16 TORONTO	1	2	1	3	2	1	3	3	2	1	2
17 NEW YORK	1	2	2	3	2	1	3	3	2	1	2
18 LOS ANGELES	1	2	2	3	1	1	3	3	2	1	2
19 SÃO PAULO	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	2
20 RIO DE J.	1	2	2	1	1	1	2	2	2	1	2
21 LIMA	1	1	1	1	1	1	1	2	3	1	3
22 SYDNEY	2	2	1	2	1	2	3	3	2	1	2

駐在員の居住年数が比較的長いので、言葉が上達しているのであろう。

それに対して、「不自由している」と答えた者が有意に多かった都市は、パリである。パリで日頃の言葉に不自由している者が多かった理由は、表4から見ると、駐在員の赴任してからの期間が短い者が多いことと、よくいわれているように、フランス人が外国語を使うことを嫌うことに、起因しているのであろう。

総じて、この結果からは、駐在員とその家族の言語生活は、日本語と英語を中心に用いているということがわかる。

Q6では、駐在員の家庭で、使用人を何人、どんな職種で雇っているのかを質問した。この結果の整理にあたっては、世帯単位にデータをまとめた。表16には、使用人の数を示している。この結果からみると、ロンドン、ストックホルム、トロント、ニューヨーク、シドニーの駐在員の家庭では、現地の使用人を雇っていない。それに対して、バンコク、ジャカルタ、ダッカ；カラチ、カイロ、ナイロビ、リマの都市では、

表16 使用人の数(世帯別)

	(1) 使用人なし (%)	(2) 1人 (%)	(3) 2人 (%)	(4) 3人 (%)	(5) 4人 (%)	(6) 5人 (%)	(7) 6人 (%)	世帯数
1 SEOUL	5 (22.7)	17 (77.3)	—	—	—	—	—	22
2 BANGKOK	—	17 (94.4)	1 (5.6)	—	—	—	—	18
3 JAKARTA	—	—	5(33.3)	7(46.7)	2(13.3)	1 (6.7)	—	15
4 DACCA	—	—	—	—	1(33.3)	2(66.7)	—	3
5 KARACHI	—	—	—	—	2(40.0)	1(20.0)	2(40.0)	5
6 TEHERAN	2 (40.0)	2 (40.0)	1(20.0)	—	—	—	—	5
7 LONDON	19(100.0)	—	—	—	—	—	—	19
8 PARIS	19 (90.5)	2 (9.5)	—	—	—	—	—	21
9 MILANO	15 (83.3)	3 (16.7)	—	—	—	—	—	18
10 MADRID	7 (70.0)	3 (30.0)	—	—	—	—	—	10
11 STOCKHOLM	10(100.0)	—	—	—	—	—	—	10
12 CAIRO	—	4 (80.0)	1(20.0)	—	—	—	—	5
13 ALGER	5 (71.4)	2 (28.6)	—	—	—	—	—	7
14 LAGOS	2 (15.4)	7 (53.8)	2(15.4)	1 (7.7)	—	1 (7.7)	—	13
15 NAIROBI	—	5 (71.4)	—	1(14.3)	1(14.3)	—	—	7
16 TORONTO	17(100.0)	—	—	—	—	—	—	17
17 NEW YORK	22(100.0)	—	—	—	—	—	—	22
18 LOS ANGELES	11 (91.7)	—	1 (8.3)	—	—	—	—	12
19 SÃO PAULO	5 (33.3)	8 (53.3)	2(13.3)	—	—	—	—	15
20 RIO DE J.	—	7(100.0)	—	—	—	—	—	7
21 LIMA	4 (18.2)	12 (54.5)	4(18.2)	1 (4.5)	—	1 (4.5)	—	22
22 SYDNEY	16(100.0)	—	—	—	—	—	—	16
計	159	89	17	10	6	6	2	289

その都市に駐在している家族が、使用人を雇っていることが示されている。とくに、ジャカルタ、ダッカ、カラチ、ラゴス、リマなどの都市においては、2人以上の使用人を雇っているのが珍しいことではない。

それでは、使用人は、どのような職種で雇われているのだろうか、そのことについて、表17に示した。この結果からは、使用人の職種は、第1位が、女中（メイド）であり、つづいて、掃除人、運転手、男子雑役（ボーイ）、門番、園丁の順位である。

使用人に関しては、いわゆる先進国の駐在員は、使用人を雇ってはならず、発展途上国の駐在員の生活には、使用人は不可欠な存在である。

これらの国ぐにで、使用人を雇うことは、稲村 [稲村 1980: 74-75] が報告しているように、海外駐在生活を つづけていく上では、決してぜい沢ではなく、むしろ、生活の上で欠くことのできないひとつの要素である。駐在員の家庭はパーティーが多

表17 使用人の職種(世帯別)

	(1) 女メ 中イ ・ド	(2) 掃 除 人	(3) 運 転 手	(4) 男・ボ 子・ポ 雑役イ	(5) 門 番	(6) 園 丁	(7) 料 理 人	(8) 洗 濯 人	(9) 運搬 人 ・ ラ ・ イ	(10) 不 明
1 SEOUL	16	—	—	—	—	—	—	—	—	1
2 BANGKOK	18	—	1	—	—	—	—	—	—	—
3 JAKARTA	24	—	8	4	2	—	3	1	—	2
4 DACCA	2	1	—	—	3	3	3	—	2	—
5 KARACHI	—	5	1	1	4	3	4	5	—	—
6 TEHERAN	2	1	1	—	—	—	—	—	—	—
7 LONDON	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8 PARIS	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9 MILANO	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—
10 MADRID	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—
11 STOCKHOLM	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12 CAIRO	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13 ALGER	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—
14 LAGOS	3	—	1	6	3	2	1	—	—	3
15 NAIROBI	5	—	2	3	1	1	—	—	—	—
16 TORONTO	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17 NEW YORK	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18 LOS ANGELES	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—
19 SÃO PAULO	8	4	—	—	—	—	—	—	—	—
20 RIO DE J.	6	1	—	—	—	—	—	—	—	—
21 LIMA	21	1	—	—	—	3	—	—	—	4
22 SYDNEY	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	114	20	14	14	13	13	11	6	2	10

いので、子守りが必要である。それとともに、駐在員の妻が買い物に行くと、外国人という理由で高いものを買わされる場合もある。また、現地で交通事故を起こした場合、不当にことが大きくなる可能性がある。このような理由から、これらの赴任地においては、使用人を雇うことは、けっして、ぜい沢なことではなく、むしろ不可欠なことなのである。しかし、日本での生活で使用人を使ったことのない主婦たちにとって、新たな気苦労の種になっていることも事実である。

Q8 においては、日頃の生活の上で、どのような人びととつき合っているかを質問した。この回答選択肢は、1.ほとんど現地の人である、2.ほとんど日本の人である、3.ほとんど、現地の人でもなく、日本人でもない、それ以外の国の人である、4.ほとんど日系人（二世、三世）である、の4つであった。

集計の結果、回答者は、全体として、1.ほとんど現地の人である、2.ほとんど日本人であるの2つの回答に集中した。その結果、この2つのカテゴリー間で有意差検定をおこない、その結果を表15の Q8 欄に示した。この結果を見ると、日頃の生活の上でつき合っている相手が、「ほとんど現地の人である」と答えた者の数と「ほとんど日本の人である」と答えた者の数の間に有意な差を見出し得なかったのは、ダッカ、ストックホルム、シドニーであった。その他の19都市においては、日頃のつき合いは、日本人同士であると答えたものが多かった。このことから、海外における日本人駐在員が、それぞれの都市において、ひとつのまとまりをもちながら生活していると考えられる。いわゆる、日本人街がつくられており、そこでは、かなり日本人同士が交流しているようである。

Q22 においては、現地語の新聞を読んでいるかをたずねた。回答選択肢は、1.毎日読んでいる、2.ときどき読んでいる、3.ほとんど読まない、4.まったく読まない、の4つであった。結果の整理において、1と2を、「読んでいる」のカテゴリーにまとめ、3と4を、「読んでいない」のカテゴリーにまとめて、その両者の間の検定をおこなったのが、表15の Q22 欄である。この結果から、「読んでいない」と答えた者が有意に多かった都市は、バンコクであった。

それに対して、「読んでいる」と答えた者が有意に多かった都市は、ソウル、ロンドン、トロント、ニューヨーク、ロサンゼルス、リオデジャネイロ、シドニーの各都市である。これらの都市の特徴は、ソウルとリオデジャネイロをのぞいて、英語圏の都市である。

Q23 においては、現地のテレビ、ラジオを視聴しているかどうかを質問した。回答選択肢は、1.毎日視聴している、2.ときどき視聴している、3.ほとんど視聴してい

ない、4.まったく視聴していない、の4つであった。結果の整理においては、1と2を加えて、「視聴している」のカテゴリーとし、3と4を加えて、「視聴していない」のカテゴリーとした。そして、この両者間の検定をおこなったのが、表15の Q23 欄である。この結果から、「視聴していない」と答えた者の数が有意に多い都市は、カラチとラゴスであった。それに対して、「視聴している」と答えたものが、有意に多かったのは、ソウル、ロンドン、パリ、ミラノ、マドリード、ストックホルム、ナイロビ、トロント、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンパウロ、リオデジャネイロ、リマ、シドニーであった。

テレビ、ラジオに関しては、英語圏において、より多く視聴されているといった傾向はない。これは、テレビ、ラジオが新聞よりも娯楽性が高く、言葉を越えて音楽や画面を楽しめるからであろう。

海外でビジネス活動をつづけていく駐在員にとって、新聞やラジオ、テレビとの接触は不可欠な要素と思われるが、Q22、Q23の結果では、これら現地のマスコミュニケーションへの接触は意外に低いものである。これについては、後述の Q9-26 において、日本からの新聞の取りよせについて調査したが、ダッカとリオデジャネイロをのぞいて、日本の新聞を取りよせている者が圧倒的に多かった。また松浦らの調査によれば、海外駐在員の73.8パーセントが『日本経済新聞』を取りよせており、60.5パーセントが『朝日新聞』を取りよせているという[松浦・俵ら 1980: 17]。これらの事情を考え合わせると、海外駐在員にとっての情報源は、日本の新聞が大きな役割をはたしているようである。

Q19 においては、. 現地の人や外国人とのパーティーをどのように思うかについてたずねた。回答選択肢は、1.たいへん楽しい、2.楽しい、3.わずらわしい、4.たいへんわずらわしい、の4つであった。結果の整理に際しては、1と2を加えて、「楽しい」のカテゴリーとした。また、3と4を加えて、「わずらわしい」のカテゴリーとした。そして、この両者間で検定をおこなったが、その結果は、表15の Q19 欄に示した。これによれば、「わずらわしい」と答えた者の数が有意に多い都市はなかった。それに対して、「楽しい」と答えた者の数が有意に多かった都市は、ソウル、バンコク、ジャカルタ、ロンドン、パリ、ミラノ、マドリード、ストックホルム、ラゴス、トロント、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンパウロ、シドニーであった。

Q13 においては、現地の人とのつき合いについて質問した。この回答選択肢は、1.たいへん楽しい、2.楽しい、3.わずらわしい、4.たいへんわずらわしい、の4つである。結果の整理に際しては、1と2を加えて、「楽しい」のカテゴリーとした。ま

た、3と4を加えて「わずらわしい」のカテゴリーとした。そして、この両者間の検定をおこなったのが、表15の Q13 欄である。この結果から、現地の人とのつき合いにおいて、わずらわしいという答が、有意に多かった都市はない。一方、現地の人とのつき合いが楽しいと答えた者の数が有意に多い都市は、ソウル、バンコク、ロンドン、ミラノ、マドリード、ストックホルム、トロント、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンパウロ、リマ、シドニーである。

Q13 現地の人とのつき合いについてと、Q19 現地の人や外国人をまじえたパーティーでの印象について、クロス集計したのが表18である。この表から、現地の人とのつき合いも楽しく、パーティーも楽しいと答えたのは、ソウル、バンコク、ロンドン、ミラノ、マドリード、ストックホルム、トロント、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンパウロ、シドニーであった。これらの11都市は、ソウル、バンコク、サンパウロをのぞいて、ヨーロッパ、北アメリカ、オーストラリアの国ぐにである。

それに対して、パーティーが「楽しい」と答えたものと、「わずらわしい」と答えたものの数が相半ばし、現地の人びととのつき合いが「楽しい」と答えたものと、「わずらわしい」と答えたものの数が相半ばした都市は、ダッカ、カラチ、テヘラン、カイロ、アルジェ、ナイロビ、リオデジャネイロである。これらの国ぐにの地理区分は、アジア、中近東、アフリカ、南アメリカである。

第2グループにおいて、Q21, Q8, Q22, Q23, Q19, Q13 の回答パターンは、いくつかのクラスに分類することができる。

ひとつのクラスは、日頃の生活の中で、言葉に不自由はないが、日頃の生活の中でつき合っているのは、もっぱら日本人である。それとともに、現地のテレビ、ラジオ、新聞をよく視聴読しており、現地の人びととのパーティーや、現地の人とのつき合いを楽しんでいる。このような回答パターンを示したのは、ニューヨークとロサンゼルスの2都市である。ともにアメリカ合衆国の都市である点が興味深い。これと似たクラスとしては、日頃の生活の中で、言葉に不自由している者の数がややふえるが、そのほかの項目に関しては、アメリカの都市と同じく日頃の生活の中でつき合っているのは、もっぱら日本人であり、それとともに、現地のテレビ、ラジオ、新聞をよく視聴読しており、現地の人びととのパーティーや、現地の人とのつき合いを楽しんでいる。このようなクラスとして、ソウル、ロンドン、トロントの3都市がある。これら7つの都市は、日本人駐在員と現地社会との接触という点に関してひとつの模範的ケースということができよう。とくに、ニューヨーク、ロサンゼルスでは、言葉に不自由はなく、現地のマスコミともよく接触しており、かつ現地の人びととのつき

合いも友好的になされている。これは、現代の日本人にとって、アメリカ社会がある意味で一番抵抗なく接触しうる社会であることを示している。すなわち、そのことは、現代の日本社会が、現代のアメリカ社会と一脈通じ合うところがあることを意味しているのであろう。それとともに、われわれ日本人が、アメリカ社会に対して、実に多くの知識を持っていることが、駐在員がアメリカ社会に抵抗なく接触しうる背景となっているのであろう。

これに対してもうひとつのクラスでは、日頃の生活において言葉に不自由している

表18 Q13×Q19

		Q19 現地の人びととのパーティー		
		1 楽しい	2 有意差なし	3 わずらわしい
Q13 現地の 人びと との つき 合い	1 楽 し い	SEOUL BANGKOK LONDON MILANO MADRID STOCKHOLM TORONTO NEW YORK LOS ANGELES SÃO PAULO SYDNEY	LIMA	
	2 有 意 差 な し	JAKARTA PARIS LAGOS	DACCA KARACHI TEHERAN CAIRO ALGER NAIROBI RIO DE J.	
	3 わ ず ら わ し い			

者と、不自由していない者とが相半ばしており、日頃の生活においてつき合っているのは、日本人が多い。また、現地のテレビ、ラジオ、新聞を視聴している者と、していない者は相半ばしており、現地の人びととのパーティーやつき合いも、楽しいと答えた者と、わずらわしいと答えた者が、相半ばする回答を示している。このようなパターンを示したのは、カイロ、アルジェの2都市であった。この2つの都市が、ともに北アフリカにあり、日本人駐在員が現地社会との接触到に苦心している様子がよくうかがえるのである。

3. 第3グループ：赴任地における日本人同士のつき合い

Q17においては、現地の日本大使館の集りに参加するかを質問した。回答選択肢は、1.はい、2.ときどき、3.いいえ、の3つであった。集計に際しては、1と2を、「参加する」のカテゴリーとし、3を「参加しない」のカテゴリーとして、この両者の間で検定をおこなった。その結果は、表15のQ17欄に示した。この結果から、「参加する」と答えたものが、有意に多かった都市は、ダッカ、カラチ、マドリード、ストックホルム、カイロ、アルジェ、ラゴス、ナイロビ、トロント、リマの10都市であった。「参加しない」と答えたものが、有意に多かった都市は、ジャカルタ、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンパウロの都市であった。これらの都市は、数多くの日本人が居住しており、大使館の主催する集りが、日本人同士の社交にそれほど意味を持ってはいないのである。

Q16においては、日本人会に参加しているかを質問した。回答選択肢は、1.はい、2.いいえ である。この両者の間の検定をおこなった結果は、表15のQ16欄に示した。日本人会に参加すると答えたものが、有意に多かったのは、ソウル、バンコク、ジャカルタ、ダッカ、カラチ、テヘラン、パリ、ミラノ、マドリード、ストックホルム、カイロ、アルジェ、ラゴス、ナイロビ、トロント、リマ、シドニーの17都市である。それに対して、参加しないと答えたものが有意に多かったのは、サンパウロであった。

Q14では、居住地の近くには、日本人がいるのかを質問した。回答選択肢は、1.たいへん多い、2.多い方である、3.あまり多くない、4.まったくない、の4つである。結果の整理に際しては、1と2を加えて、「多い」のカテゴリーとし、3と4を加えて、「少ない」のカテゴリーとして、この両者間の有意差検定をおこなった。その結果は、表15のQ14欄に示した。これによると、近くに日本人が多いと答えた都市は、ソウル、バンコク、ジャカルタ、パリ、カイロ、ラゴス、ニューヨーク、ロサンゼルスの8都市である。これらの都市では、日本人が集中して住んでいるのであろう。

それに対して、アルジェでは、近くには日本人は住んでいないと答えた者の数が多かった。

Q15 では、日頃の日本人とのつき合いを、どう思うか、をたずねた。回答選択肢は、1.できるだけつき合いたいと思う、2.つき合いたいと思う、3.あまりつき合いたいとは思わない、4.まったくつき合いたいとは思わない、の4つであった。結果の整理に際しては、1と2を加えて、「つき合いたい」のカテゴリーとし、3と4を加えて、「つき合いたくない」のカテゴリーとして、この両者の間で検定をおこない、その結果を表15の Q15 欄に示した。この結果から、日本人とはつき合いたくないと答えた者が多い都市はなかった。ただ、ジャカルタ、カラチ、テヘラン、ミラノ、カイロ、ロサンゼルス、サンパウロ、リオデジャネイロの8都市では、「つき合いたい」と「つき合いたくない」との回答が相半ばしている。

Q20 では、会社の同僚、またはその家族とのつき合いについて質問した。回答選択肢は、1.ひじょうに大切だと思う、2.大切だと思う、3.大切だと思わない、4.ぜんぜん大切だと思わない、の4つである。結果の整理に際しては、1と2を加えて、「大切だと思う」のカテゴリーとし、3と4を加えて、「大切だとは思わない」のカテゴリーとして、この両者間で有意差検定をおこない、表15の Q20 欄に示した。この結果から、会社の同僚あるいはその家族とのつき合いを、「大切だとは思わない」と答えた者が多かった都市は、ひとつもなかった。ただ、ジャカルタのみが、「大切だと思う」と「大切だとは思わない」と答えた者の数が、相半ばしている。

Q18 では、日本からのお客の接待について、質問した。回答選択肢は、1.たいへん楽しい、2.楽しい、3.わずらわしい、4.たいへんわずらわしい、の4つで、結果の整理に際しては、1と2を加えて、「楽しい」のカテゴリーとし、3と4を加えて、「わずらわしい」のカテゴリーとして、この両者間の有意差検定をおこなった。その結果は表15の Q18 欄に示した。これによると、日本からのお客の接待を、わずらわしいと答えた者が多い都市は、ひとつもなかった。しかし、「楽しい」と答えたものが多かった都市は、テヘラン、ストックホルム、ラゴス、ナイロビ、トロントの5都市であり、その他の都市では、「楽しい」と「わずらわしい」という答が、相半ばしている。「楽しい」と答えた都市が、いずれも、それほど日本人が多く訪れることのない都市であるのは興味深いことである。

つぎに、Q17、大使館の集りに参加するかと、Q16、日本人会に参加するか、のクロス集計をおこなったのが、表19である。この結果からは、大使館の集りにも「参加する」し、日本人会にも「参加する」と答えたのは、9都市におよんでいる。

表19 Q16×Q17

		Q17 大使館の集りへの参加		
		1 参加する	2 有意差なし	3 参加しない
Q16 日本人会への参加	1 参加する	DACCA KARACHI MADRID STOCKHOLM CAIRO ALGER LAGOS TORONTO LIMA	SEOUL BANGKOK TEHERAN PARIS MILANO SYDNEY	JAKARTA
	2 有意差なし		LONDON RIO DE J.	NEW YORK LOS ANGELES
	3 参加しない			SÃO PAULO

それに対して、日本人会には参加するが、大使館の集りには「参加する」と、「参加しない」の間に有意差のなかった都市は、6都市である。ジャカルタは、大使館の集りには参加しないと答えたものが多いが、その反面、日本人会には参加すると答えている。

概して駐在員の間では、大使館の集りよりも、日本人会への参加の傾向が大きい。ただ、サンパウロにおいては、この二つの会合に対して、参加しないと表明したものが多かった。

Q14においては、近くに日本人が多くすんでいるかをたずねたが、これに、Q8の

表20 Q8×Q14

		Q14 近くに日本人は		
		1 多い	2 有意差なし	3 居ない
Q8	1 現地の人は			
	2 有意差なし		DACCA (1) STOCKHOLM (1) SYDNEY (1)	
	3 日本人	SEOUL (1) BANGKOK (1) JAKARTA (2) PARIS (1) CAIRO (2) LAGOS (1) NEW YORK (1) LOS ANGELES (2)	KARACHI (2) TEHERAN (2) LONDON (1) MILANO (2) MADRID (1) NAIROBI (1) TORONTO (1) SÃO PAULO (2) RIO DE J. (2) LIMA (1)	ALGER (1)

注：都市名のあとの数字は、Q15「日本人とのつき合いの印象」で、1.つき合いたい、2.有意差なし、3.つき合いたいとは思わないを意味している。

日頃のつき合いをしている人びとはだれかをクロス集計したのが、表20である。それに加えて、Q15の日本人とのつき合いについての印象を重ね合わせた。この結果を見ると、日本人が近くに多くすんでおり、また、日頃のつき合いは日本人とする、と答えたのは、ソウル、バンコク、ジャカルタ、パリ、カイロ、ラゴス、ニューヨーク、ロサンゼルス等の8都市であり、これらが、いわゆる交流の多い日本人社会を形成しているようである。

これらの結果を見て指摘できる傾向は、海外赴任地における日本人駐在員は、都市

によっては、集中して住んでいるが、これはすべての都市でそのような傾向にあるとはいえない。大使館の集りよりも、日本人会の集りを重視しており、日本人同士のつき合いを大切にしている。とくに会社の同僚やその家族とのつき合いは、とりわけ大切にしている。しかし、日本からの客は、あまり日本人が訪れることの多くない都市では歓迎されるが、それ以外の都市では、「楽しい」と「わずらわしい」が相半ばしているのが現状である。

ジャカルタは、これらの日本人同士のつき合いについては、むしろ淡泊な傾向を示している。これは、ジャカルタにおける日本人の多いこと、また、インドネシアを訪れる日本人旅行者の多いことがその原因であろう。

4. 第4グループ：子供の教育

Q25 においては、子供は、どの程度現地の学校に通わせたいと希望しているかを質問した。回答選択肢は、1.大学まで、2.高等学校まで、3.中学校まで、4.小学校まで、5.子供は日本で教育したい、の5つのカテゴリーである。集計に際しては、まずはじめに、5.子供は日本で教育したい、と答えたものの占めるパーセントが小さいものから順番に並べた。つづいて、この5つのカテゴリーに、4.小学校まで、と答えたものの数を加えてその比率をもとめ、それを、比率の小さいものの順に並べた。以下同様にして、高等学校まで、と答えたもののいわゆる累積パーセントを求めた。そして最後に、1.大学まで、と答えたものの比率を、大きい順序に並べた。その結果は、表21に示した。すなわちこの表21の意味するところは、並べられた順位が下位であるほど、現地の教育に対して、信頼度が低いことを意味している。

さて、この結果からは、赴任地においてどのレベルの学校まで通わせ、またどのレベルの学校からは日本で教育したいと考えているかが明らかである。それぞれの回答において、全体の4分の1にあたる6つの都市を、順位の低いものから見ることにする。

子供は日本で教育したいと答えたものの比率が、多かった6つの都市は、アルジェ、ラゴス、カイロ、ロサンゼルス、ナイロビ、ダッカであった。この6都市の中で、アルジェが42.9パーセントととびぬけて高い比率で、このような希望を表明している。子供を日本で教育したいと希望しているものは、全体の9.2パーセントである。

つぎに、小学校を終えた段階で、子供を日本に帰したいと希望している率の高いもの1位から6位までは、カイロ、ダッカ、ナイロビ、アルジェ、ミラノ、ニューヨークである。このうち、カイロでは、80パーセントの人びとが子供は日本で教育するか、

表21 子供はどの程度まで現地の学校に通わせるか

(5) 子供は日本で教育 したい		(4) 小学校まで (5)+(4)の累積パー セント		(3) 中学校まで (5)+(4)+(3)の累積 パーセント		(2) 高等学校まで (5)+(4)+(3)+(2)の 累積パーセント		(1) 大学まで		
1	KARACHI 0 (0.0)	1	TORONTO 7(20.6)	1	LOS ANGELES 14 (66.7)	1	TEHERAN 7 (70.0)	1	DACCA 1(25.0)	
2	LONDON 1 (3.8)	2	SÃO PAULO 8(29.6)	2	TORONTO 23 (67.7)	2	DACCA 3 (75.0)	2	TEHERAN 2(20.0)	
3	MADRID 1 (5.0)	3	LONDON 10(38.4)	3	TEHERAN 7 (70.0)	3	LONDON 20 (76.8)	3	LONDON 5(19.2)	
4	BANGKOK 2 (5.7)	4	TEHERAN 4(40.0)	4	RIO DE J. 5 (71.5)	4	KARACHI 8 (80.0)	4	RIO DE J. 1(14.3)	
5	TORONTO 3 (8.8)	5	SYDNEY 13(41.9)	5	LONDON 19 (73.0)	5	SYDNEY 26 (83.9)	5	PARIS 4(14.3)	
6	TEHERAN 1(10.0)	6	RIO DE J. 3(42.9)	6	SÃO PAULO 20 (74.0)	6	LOS ANGELES 18 (85.7)	6	LOS ANGELES 3(14.3)	
7	RIO DE J. 1(14.3)	7	LIMA 19(48.7)	7	SYDNEY 23 (74.2)	7	PARIS 24 (85.7)	7	NEW YORK 4(12.9)	
8	SÃO PAULO 4(14.8)	8	KARACHI 5(50.0)	8	DACCA 3 (75.0)	8	RIO DE J. 6 (85.8)	8	TORONTO 4(11.8)	
9	JAKARTA 4(15.4)	9	MADRID 10(50.0)	9	LIMA 31 (79.5)	9	NEW YORK 27 (87.1)	9	JAKARTA 3(11.5)	
10	STOCKHOLM 3(15.8)	10	STOCKHOLM 10(52.6)	10	CAIRO 8 (80.0)	10	TORONTO 30 (88.3)	10	SÃO PAULO 3(11.1)	
11	SYDNEY 5(16.1)	11	JAKARTA 14(53.9)	11	KARACHI 8 (80.0)	11	JAKARTA 23 (88.5)	11	STOCKHOLM 2(10.5)	
12	LIMA 7(17.9)	12	LOS ANGELES 12(57.2)	12	MADRID 16 (80.0)	12	SÃO PAULO 24 (88.8)	12	CAIRO 1(10.0)	
13	SEOUL 6(18.8)	13	BANGKOK 21(60.0)	13	JAKARTA 21 (80.8)	13	STOCKHOLM 17 (89.4)	13	KARACHI 1(10.0)	
14	MILANO 7(20.0)	14	SEOUL 11(65.7)	14	PARIS 33 (82.1)	14	CAIRO 9 (90.0)	14	SYDNEY 3 (9.7)	
15	PARIS 6(21.4)	15	PARIS 19(67.8)	15	NEW YORK 26 (83.9)	15	MILANO 33 (94.3)	15	MILANO 2 (5.7)	
16	NEW YORK 7(22.6)	16	LAGOS 17(70.8)	16	STOCKHOLM 17 (89.4)	16	MADRID 19 (95.0)	16	MADRID 1 (5.0)	
17	DACCA 1(25.0)	17	NEW YORK 22(71.0)	17	BANGKOK 33 (94.3)	17	BANGKOK 34 (97.2)	17	BANGKOK 1 (2.9)	
18	NAIROBI 4(28.6)	18	MILANO 25(71.4)	18	MILANO 33 (94.3)	18	LIMA 38 (97.4)	18	SEOUL 0 (0.0)	
19	LOS ANGELES 6(28.6)	19	ALGER 10(71.5)	19	SEOUL 21 (97.0)	19	LAGOS 24(100.0)	19	NAIROBI 0 (0.0)	
20	CAIRO 3(30.0)	20	NAIROBI 10(71.5)	20	LAGOS 24(100.0)	20	ALGER 14(100.1)	20	LAGOS 0 (0.0)	
21	LAGOS 8(33.3)	21	DACCA 3(75.0)	21	ALGER 14(100.1)	21	NAIROBI 14(100.1)	21	ALGER 0 (0.0)	
22	ALGER 6(42.9)	22	CAIRO 8(80.0)	22	NAIROBI 14(100.1)	22	SEOUL 22(100.0)	22	LIMA 0 (0.0)	
	計 41 (9.2)		185(41.5)		142 (31.8)		37 (8.3)		41 (9.2)	446 (100.0)
	累積パーセント 9.2		50.7		82.5		90.8		100.0	

小学校を終えた段階で帰国させたいという希望を表明している。全体としてみると、現地での教育は小学校まで、と答えた者の比率は、41.5パーセントで、子供は日本で教育したいと答えた者の比率を加えると、50.7パーセントの者が、子供は小学校を終えた段階で日本に帰国させたいと考えている。

つぎに、中学校を終えた段階ないしはそれ以前までに子供を日本で教育したいと希望している比率の高い6位までは、ナイロビ、アルジェ、ラゴス、ソウル、ミラノ、バンコクである。このうち、ナイロビ、アルジェ、ラゴスにおいては、100.0パーセントの人のびとが、そのように希望している。いいかえれば、これらの3つの都市においては、現地では、これ以上の教育を受けさせる気持のないことを表明している。全体的傾向として、全回答者の82.5パーセントの人のびとが、子供は、中学校を終えた段階、またはそれまでに日本に帰国させたいと希望している。

ちなみに、高等学校まで通学させると答えたのは、全体の8.3パーセントで、高等学校を終え、あるいはそれまでに子供を帰国させよう并希望しているものの累積パーセントは、90.8パーセントである。

現地の大学に進学させることを希望しているのは、全体の9.2パーセントにすぎない。

これらの結果を見ると、子供は中学校卒業とともに、日本に帰国させて、高等学校、大学は日本で教育したいという強い希望がうかがえる。

Q26においては、子供の交際範囲について質問した。回答選択肢は、1.なるべく現地人の子供と遊ばせたい、2.なるべく日本人の子供と遊ばせたい、3.子供の自由にしている、の3つである。その結果は、表22に示されている。この結果を見ると、全体的傾向として、72.1パーセントの親が、子供の交際は、子どもの自由にさせていると答えている。それに対して、17.7パーセントは、現地人の子供と遊ばせるようにしている、と答えている。

いまこの、現地人の子供と遊ばせるようにしているという回答を、そのパーセント大きい順位にしたがって並べたのが、表22の(4)である。全体の4分の1にあたる上位6位までを見ると、リオデジャネイロ、シドニー、トロント、パリ、ロサンゼルス、ミラノであり、南アメリカ、オーストラリア、北アメリカ、ヨーロッパの都市である。

また、なるべく日本人の子供と遊ばせるようにしていると答えたものの、全体に対するパーセントを、その大きい順にならべたものが、表22の(5)である。この結果から、なるべく日本人の子供と遊ばせるようにしている、と答えた都市は、カラチ、ア

表22 子 供 の 交 遊 範 囲

	(1) なるべく現 地人の子供と遊 ばせたい (%)	(2) なるべく日本 人の子供と遊 ばせたい (%)	(3) なるべく自 由にしてい る (%)	計	順 位	(4) なるべく現 地人の子供と遊 ばせたい (%)	順 位	(5) なるべく日本 人の子供と遊 ばせたい (%)
1 SEOUL	0 (0.0)	3(10.0)	27(90.0)	30	1 RIO DE J.	3(42.9)	1 KARACHI	6(60.0)
2 BANGKOK	0 (0.0)	4(11.8)	30(88.2)	34	2 SYDNEY	13(41.9)	2 ALGER	7(53.8)
3 JAKARTA	6(21.4)	5(17.9)	17(60.7)	28	3 TORONTO	11(33.3)	3 CAIRO	3(30.0)
4 DACCA	0 (0.0)	1(25.0)	3(75.0)	4	4 PARIS	9(29.0)	4 NAIROBI	4(28.6)
5 KARACHI	1(10.0)	6(60.0)	3(30.0)	10	5 LOS ANGELES	6(28.6)	5 LAGOS	6(25.0)
6 TEHERAN	0 (0.0)	1(10.0)	9(90.0)	10	6 MILANO	9(25.0)	6 DACCA	1(25.0)
7 LONDON	4(16.0)	1 (4.0)	20(80.0)	25	7 STOCKHOLM	4(22.2)	7 JAKARTA	5(17.9)
8 PARIS	9(29.0)	1 (3.2)	21(67.7)	31	8 JAKARTA	6(21.4)	8 BANGKOK	4(11.8)
9 MILANO	9(25.0)	0 (0.0)	27(75.0)	36	9 NEW YORK	7(21.2)	9 SEOUL	3(10.0)
10 MADRID	3(15.0)	1 (5.0)	16(80.0)	20	10 LONDON	4(16.0)	10 TEHERAN	1(10.0)
11 STOCKHOLM	4(22.2)	0 (0.0)	14(77.8)	18	11 LIMA	6(15.8)	11 LIMA	3 (7.9)
12 CAIRO	1(10.0)	3(30.0)	6(60.0)	10	12 MADRID	3(15.0)	12 SÃO PAULO	2 (7.1)
13 ALGER	1 (7.7)	7(53.8)	5(38.5)	13	13 SÃO PAULO	4(14.3)	13 NEW YORK	2 (6.1)
14 LAGOS	0 (0.0)	6(25.0)	18(75.0)	24	14 KARACHI	1(10.0)	14 MADRID	1 (5.0)
15 NAIROBI	0 (0.0)	4(28.6)	10(71.4)	14	15 CAIRO	1(10.0)	15 LOS ANGELES	1 (4.8)
16 TORONTO	11(33.3)	0 (0.0)	22(66.7)	33	16 ALGER	1 (7.7)	16 LONDON	1 (4.0)
17 NEW YORK	7(21.2)	2 (6.1)	24(72.7)	33	17 SEOUL	0 (0.0)	17 PARIS	1 (3.2)
18 LOS ANGELES	6(28.6)	1 (4.8)	14(66.7)	21	18 BANGKOK	0 (0.0)	18 MILANO	0 (0.0)
19 SÃO PAULO	4(14.3)	2 (7.1)	22(78.6)	28	19 DACCA	0 (0.0)	19 STOCKHOLM	0 (0.0)
20 RIO DE J.	3(42.9)	0 (0.0)	4(57.1)	7	20 TEHERAN	0 (0.0)	20 TORONTO	0 (0.0)
21 LIMA	6(15.8)	3 (7.9)	29(76.3)	38	21 LAGOS	0 (0.0)	21 RIO DE J.	0 (0.0)
22 SYDNEY	13(41.9)	0 (0.0)	18(58.1)	31	22 NAIROBI	0 (0.0)	22 SYDNEY	0 (0.0)
計	88(17.7)	51(10.2)	359(72.1)	498 (100.0)				

ルジェ、カイロ、ナイロビ、ラゴス、ダッカであり、これらは、いずれも、アジア、アフリカの国々の都市であった。

これらの結果から、海外駐在員の親たちは、子供の交際範囲は、基本的には子供の自由にまかせている。しかし、アジア、アフリカ地域に駐在している親たちの間には、現地人の子供との交遊を望まず、むしろ日本人の子供と遊ばせたがる傾向が、うかがえるのである。

Q28 では、子供が外国で教育を受けるとすると、そのことが子供の将来にとって不利になると思うか、を質問した。回答選択肢は、1.まったくそう思う、2.そう思う、3.そう思わない、4.まったくそう思わない、の4つである。結果の整理に際しては、1と2を加えて、「不利だと思う」のグループとし、3と4を加えて、「不利だと思わない」のグループとして、この両者の間の検定をおこない、その結果を、表15の Q28 欄に示した。この結果から、子供が外国で教育を受けることが、その子供の将来にとって不利であると答えた者が多い都市はなかった。「不利だとは思わない」と答えた者が多かったのは、ソウル、バンコク、ジャカルタ、パリ、マドリード、ストックホルム、サンパウロの7都市であった。

Q28 において、海外で教育を受けることが子供の将来において不利になるとは考えていない。それでは、Q25 において、どの程度まで現地の学校に通わせるのかを見ると、その大半が、中学校までである。この2つの項目を組み合わせて考えてみると、駐在員は、初等中等教育を海外で受けさせても、子供の将来には不利にならないと考えていることが明らかである。

Q29 では、海外にも子供のための勉強塾は必要か、について質問した。回答選択肢は、1.ぜひ必要だ、2.必要だ、3.必要でない、4.ぜんぜん必要でない、の4つである。結果の整理においては、1と2を加えて、「必要だ」のカテゴリーとし、3と4を加えて、「必要ない」のカテゴリーとした。そしてこの両者の間の検定をおこなった結果を、表15の Q29 欄に示した。これによると、海外において、子供のための勉強塾が必要だと答えた者が有意に多い都市はなかった。勉強塾は必要でないと答えた者が多かった都市は、ジャカルタ、ダッカ、パリ、ミラノ、ストックホルム、ラゴス、ロサンゼルス の7都市であった。

Q28 海外での教育は、子供の将来にとって不利になると考えるか、という項目と、Q29 海外においても、勉強塾は必要か、という項目のクロス集計をおこなったのが、表23である。この結果からは、海外における教育は、子供の将来にとって不利だと答えたものが多かった都市も、海外においては勉強塾は必要だと答えたものが多かった

都市もない。それに対して、海外での教育は、子供の将来にとって不利だとは思わないと答え、また同時に、海外において子供の勉強塾は必要でないと答えたものが多かった都市は、ジャカルタ、パリ、ストックホルムの3都市であった。いうなれば、これらの3都市にあっては、現在の子供の教育に大きな悩みはないと考えられる。

それに対して、海外での教育は、子供の将来にとって不利だと答えたものと、不利でないと答えたものの数が相半ばし、また同時に、海外において、子供のための勉強

表23 Q28×Q29

		Q29 赴任地に勉強塾は必要か		
		1 必要だ	2 有意差なし	3 必要ではない
Q28 子供にとって海外での教育は	1 不利だ			
	2 有意差なし		KARACHI TEHERAN LONDON CAIRO ALGER NAIROBI TORONTO NEW YORK RIO DE J. LIMA SYDNEY	DACCA MILANO LAGOS LOS ANGELES
	3 不利でない		SEOUL BANGKOK MADRID SÃO PAULO	JAKARTA PARIS STOCKHOLM

塾が必要だと答えたものと、必要でないと答えたものとの数が、相半ばしている都市は、カラチ、テヘラン、ロンドン、カイロ、アルジェ、ナイロビ、トロント、ニューヨーク、リオデジャネイロ、シドニーの11都市であった。いうなれば、これらの都市における駐在員たちは、自分たちのおかれている教育状況に、多少悩みをいだいているグループということができるだろう。

このことを、後述する他の質問項目との関連において分析してみると、より明確になる。Q30-11においては、それぞれの国の教育環境について質問している。その回答において、教育環境はこの国の方がよい、と答えたものが有意に多かったのは、パリ、トロント、ロサンゼルス、の3都市であった。これらの3都市の教育環境は、日本よりもすぐれていると考えられているのである。

次に、この国の方がよい、と答えたものと、日本の方がよいと答えたものとの数が相半ばしているのは、ロンドン、ストックホルム、ニューヨーク、シドニーの4都市であり、他の15都市は、すべて日本の方がよいと答えている。

いま、表23との関連においてみると、教育問題に悩みを示さなかった3つの都市、ジャカルタ、パリ、ストックホルムのうち、パリとストックホルムは、Q31-11において、教育環境がめぐまれていることが明らかにされているので、容易に解釈がつく。ジャカルタに関しては、日本人学校が充実しており、それほど不満がないのであろう。

教育環境は、このように、日本より恵まれていると判断される都市があるのに対して、教育水準について問うたQ30-12においては、すべての都市において、日本の

表24 日本と赴任地における住居

		日本では (%)		海外赴任地では (%)	
一戸建	持ち家	128 (45.1)	158(55.6)	4 (1.4)	103(35.6)
	借家	11 (3.9)		64 (22.1)	
	社宅	11 (3.9)		34 (11.8)	
	その他	8 (2.8)		1 (0.3)	
アパート	分譲	58 (20.4)	111(39.1)	2 (0.7)	174(60.2)
	賃貸	10 (3.5)		122 (42.2)	
	社宅	41 (14.4)		49 (17.0)	
	その他	2 (0.7)		1 (0.3)	
下宿(ペンションを含む)		0 (0.0)		1 (0.3)	
その他		15 (5.3)		11 (3.8)	
計		284(100.0)		289(100.0)	

方がすぐれていると判断されている。日本の教育水準の高さが海外での子弟教育の悩みを一層深刻なものにしているであろう。

5. 第5グループ：赴任地での住み心地

Q5では、日本において、どのような住居に住んでいるかを質問した。結果の整理に際して世帯を単位としたが、その結果は表24に示した。この結果から、一戸建の持家と分譲アパートを合計すると、これは全世帯の65.5パーセントにあたる。

Q4では、赴任地での住居を質問した。その結果は、赴任地別に、表25に示した。この結果から、住居形式別にみると、アパート形式の住居に住んでいる者が多い都市は、ソウル、バンコク、パリ、ミラノ、マドリード、カイロ、サンパウロ、リオデジャネイロの8都市であった。それに対して、一戸建形式の住居に住んでいる者が多い都市は、ジャカルタ、ロンドン、ロサンゼルス、リマ、シドニーであった。

また、後述の Q11-4 において、住いの広さを質問したが、ソウルとラゴスをのぞいた都市では、住いの広さには不便がないと答えていることから、駐在員の住居は、不便のない程度に広いことがわかる。

それでは、具体的にどの程度の広さの家に住んでいるのだろうか。

松浦らの報告によれば、海外駐在員の3分の2が100平方メートル以上の住居に住んでおり、200平方メートル以上の広さの家に住んでいるものが、25パーセント程度あるので、海外駐在員は住居に関しては、めぐまれているといえよう [松浦・俵ら 1980: 8]。

さて、海外駐在員の場合、借家

表25 住居の形式

	一戸建	アパート	その他	世帯数
1 SEOUL	1	21	0	22
2 BANGKOK	0	18	0	18
3 JAKARTA	15	0	0	15
4 DACCA	3	0	0	3
5 KARACHI	5	0	0	5
6 TEHERAN	1	4	0	5
7 LONDON	12	4	3	19
8 PARIS	0	21	0	21
9 MILANO	0	18	0	18
10 MADRID	0	10	0	10
11 STOCKHOLM	4	6	0	10
12 CAIRO	0	5	0	5
13 ALGER	4	2	1	7
14 LAGOS	4	9	0	13
15 NAIROBI	3	4	0	7
16 TORONTO	5	7	5	17
17 NEW YORK	6	14	2	22
18 LOS ANGELES	10	2	0	12
19 SÃO PAULO	0	15	0	15
20 RIO DE J.	0	7	0	7
21 LIMA	14	7	1	22
22 SYDNEY	16	0	0	16
計	103	174	12	289

である場合が多いが、Q12においては、家主との関係について質問した。回答選択肢は、1.たいへんよい関係だ、2.よい関係だ、2.わずらわしい、4.たいへんわずらわしい、の4つであったが、1と2をまとめて、「よい」とし、3と4をまとめて、「わずらわしい」とし、この二つのカテゴリーの間に有意差があるか否かの検定をおこなったのが、表15のQ12欄である。その結果からは、「よい」と答えたものが有意に多かった都市は、ジャカルタ、ダッカ、ロンドン、パリ、ミラノ、ストックホルム、アルジェ、トロント、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンパウロ、リオデジャネイロ、リマ、シドニーの14都市であり、その他の都市では、「よい」と答えたものと、「わずらわしい」と答えた者の数は、有意差を示さなかった。

それでは家賃については、どのようになっているのであろうか。これも後に述べるように、Q11-12において家賃について質問したが、「家賃が高い」と答えたものが多かったのは、ソウル、バンコク、ジャカルタ、ロンドン、パリ、マドリード、カイロ、アルジェ、ラゴス、ナイロビ、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンパウロ、シドニーの14都市におよんでいる。駐在員は、現地での治安の問題や、外国人であるとの理由から、やはり、現地の人びとから見ると高級な住宅地に住まざるを得ない事情がある。このために結果として、家賃が高いと感じられるのであろう。

さて、家賃と家主との関係を見るために、Q11-12とQ12のクロス集計をおこなったのが、表26である。これを見ると、ソウル、バンコク、マドリード、カイロ、ラゴス、ナイロビの都市においては、家賃が高く、家主との関係が、「よい」と答えたものと、「わずらわしい」と答えたものが、相半ばしている。これらの都市は、住居について問題のあるところといえるだろう。

Q11においては、赴任地での住居についての、設備や間取り、生活様式についての便利、不便を質問した。項目は、1.西洋便所をつかうこと、2.飲み水、3.西洋風呂、4.住いの広さ、5.住いの設備、6.間取り、7.ベッド、8.椅子の生活、9.家の中で靴をはいていること、10.家庭電化製品の入手、11.収納・押入れ、12.家賃であった。それぞれの回答選択肢は、12.家賃をのぞいて、1.まったく不便していない、2.不便していない、3.不便している、4.まったく不便している、であるが、1と2を加えて「不便していない」とし、3と4を加えて「不便している」と2つのカテゴリーとした。なお、12.家賃については、1.たいへん安いと思う、2.安いと思う、3.高いと思う、4.たいへん高いと思う、の4つを、2つにまとめ、「安いと思う」と「高いと思う」の2つとした。これらの結果は、表15のQ11-1からQ11-12欄までに示した。

これらの結果を見ると、西洋便所を使うこと、西洋風呂に入ること、住いの広さ、ベッドに寝ること、椅子の生活に関しては、若干の例外をのぞいて、ほとんど不便していないことが明らかである。いうなれば、これらの洋風化された生活は、ほとんど抵抗がないということであろう。

それに対して、2. 飲み水に関しては、ソウル、カラチ、アルジェ、ラゴスにおいて「不便している」と答えたものが多かった。また、10. 電化製品の入手に関しては、ソウル、ダッカ、アルジェ、ナイロビの都市で不自由していると答えたものが多い。

つぎに、海外において日本人が生活していく上において、どの程度の品々を日本から取りよせているのであろうか。このことに関して、Q9において質問した。調査項目は、1. 米、2 味噌、3. 醤油、4. のり、5. つけもの、6. お茶、7. うめぼし、8. しいたけ、9. インスタント・ラーメン、10. カレー粉、11. わさび、12. 日本酒、13. 酒のつま

表26 Q11-12×Q12

		Q12 家主との関係			
		1 良	い	2 有意差なし	3 わざらわしい
Q 11 12 家 賃 に つ い て	1 安 い				
	2 有 意 差 な し	DACCA MILANO STOCKHOLM TORONTO RIO DE J. LIMA		KARACHI TEHERAN	
	3 高 い	JAKARTA LONDON PARIS ALGER NEW YORK LOS ANGELES SÃO PAULO SYDNEY		SEOUL BANGKOK MADRID CAIRO LAGOS NAIROBI	

み, 14. おかき, 15. だしのもと, 16. かんぴょう, 17. もち, 18. その他の日本食, 19. めがね, 20 男性用スーツ, 21. 女性用スーツ, 22. 男性用下着, 23. 女性用下着, 24. 紳士靴, 25. 婦人靴, 26. 日本の新聞, 27. 雑誌の類, 28. 子供の本(絵本・マンガ・雑誌), 29. 歌謡曲のテープ, 30. テレビ番組のビデオテープ, 31. 赤ちゃん用品, 32. 台所用用品, 33. くすり, 34. 自動車, 35. 冷蔵庫, 36. 洗濯機, 37. テレビ・ラジオ, 38. ステレオ, 39. 掃除機, 40. 化粧品, 41. 生理用品, 42. 避妊具, の42品目である。回答選択肢は, 1. 日本から送らせたり, 現地の日本品店を通じて取りよせている, 2. できれば取りよせたい, 3. 現地のものを用いている, 4. 必要でない, の4つのカテゴリーである。しかし集計に際しては, 1と2を加算して「日本から取りよせる」(日本品への執着)とし, 3だけを「現地のもの」(日本品への執着なし)とした。そして, その間の有意差検定をおこなった。なお, この結果の整理に関しては, 世帯単位とした。これらの結果は, 表15の Q9-1 から Q9-42 欄までに示した。

全体的傾向として, 新聞, 雑誌, 子供の本, 歌謡曲のテープ, テレビのビデオテープ, といった, 情報娯楽に関するものは, 日本から取りよせられている。それに対して, 自動車, 冷蔵庫, 洗濯機, テレビ・ラジオなどは, 現地のものを用いている。

これらの結果を都市ごとに見ると, ソウル, アルジェ, ラゴス, リマの都市では, 日本品への執着が高いようである。逆にいえば, これらの国々では, 生活物質の入手が難しいということの意味しているであろう。

つぎに, 生活のそれぞれの側面について, 日本と, それぞれの国との比較をおこなったのが, Q30 である。調査項目は, 1. 公衆道徳, 2. 消費生活の豊かさ, 3. 家族のむすびつき, 4. 性風俗, 5. 若い人のしつけ, 6. 町の清潔さ, 7. 政治的安定, 8. 治安, 9. 気候, 10. 生活の便利さ, 11. 教育環境, 12. 教育水準, 13. 金銭観, 14. 労働態度, 15. 約束を守る, 16. 親切心, 17. 自動車の運転マナー, 18. 電話の便利さ, 19. 医療保険制度, 20. 店員の接客態度, 21. 正札販売, 22. 買いやすさ, 23. 図書館・劇場などの文化施設, 24. 都市交通, 25. チップ, 26. 町並の美しさ, 27 公園・自然などの美しさ, の27項目であった。回答選択肢は, 1. 日本の方がずっと良い, 2. 日本の方が良い, 3. どちらが良いのかわからない, 4. この国の方が良い, 5. この国の方がずっと良い, の5つであったが, 結果の整理に際しては, 1と2を加えて, 「日本の方がよい」とし, 4と5を加えて, 「この国の方がよい」として, この両者の間での有意差検定をおこなった。その結果は, 表15の Q30-1 から Q30-27 欄に示した。この結果から注目されるのは, 労働態度に関しては, すべての都市で, 日本の方がよいと判断されていることである。それと同時に, チップの制度, 店員の接客態度, 商店での買いやすさ,

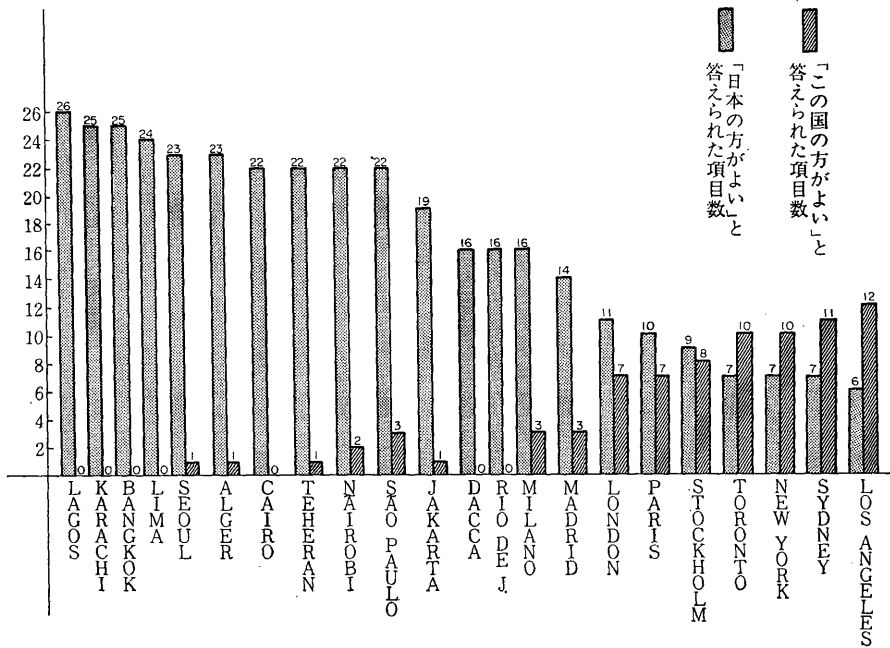


図2 生活の諸側面での比較

の項目に関しても、日本の方がよいと判断されている。

また教育環境についてみると、パリ、トロント、ロサンゼルス都市では、この国の方がよいと判断されているのに対して、教育水準に関しては、すべての都市において、日本の方がよいと判断されている。ここにも、日本の高い教育水準から、自分達の子弟を遅れさせないでおうと思う海外駐在員の悩みをうかがい知ることができるのである。

さて、Q30-1~Q30-27の結果をもとにして、「日本の方がよい」という答の数が多いものから順番に並べたのが、図2である。この図には、同時に、「この国の方がよい」と答えた項目の数をも示している。この結果からは、「日本の方がよい」と答えた項目数が多い都市は、いずれも、アフリカ、アジアの都市であり、ヨーロッパ、北アメリカの都市が、右方に位置している点は大いに興味深い現象である。とくに、トロント、ニューヨーク、シドニー、ロサンゼルス都市では、「日本の方がよい」という回答より、「この国の方がよい」という回答が上まわっている。この順位の意味することは、とりもなおさず、海外駐在員にとっての、住み心地に関するある種の指標となっているのであろう。

Q10においては、正月をどのように過しているのかを質問した。回答選択肢は、

表27 正月の過ごし方

	(1) 日本と同じ	(2) 現地の習慣 に合わせる	(3) 休暇・休養 にあてる	
1 SEOUL	10(33.3)	5(10.0)	15 (50.0)	30
2 BANGKOK	3 (8.8)	3 (8.8)	28 (82.4)	34
3 JAKARTA	3(12.0)	2 (8.0)	20 (80.0)	25
4 DACCA	1(25.0)	0 (0.0)	3 (75.0)	4
5 KARACHI	0 (0.0)	3(33.3)	6 (66.7)	9
6 TEHERAN	4(40.0)	2(20.0)	4 (40.0)	10
7 LONDON	3(11.1)	2 (7.4)	22 (81.5)	27
8 PARIS	2 (6.7)	5(16.7)	23 (76.7)	30
9 MILANO	1 (2.9)	8(22.9)	26 (74.3)	35
10 MADRID	1 (5.0)	0 (0.0)	19 (95.0)	20
11 STOCKHOLM	1 (5.9)	5(29.4)	11 (64.7)	17
12 CAIRO	0 (0.0)	3(30.0)	7 (70.0)	10
13 ALGER	0 (0.0)	0 (0.0)	13(100.0)	13
14 LAGOS	3(14.3)	1 (4.8)	17 (81.0)	21
15 NAIROBI	2(14.3)	4(28.6)	8 (54.1)	14
16 TORONTO	5(17.2)	6(20.7)	18 (62.1)	29
17 NEW YORK	6(17.6)	8(23.5)	20 (58.8)	34
18 LOS ANGELES	3(12.5)	3(12.5)	18 (75.0)	24
19 SÃO PAULO	4(15.4)	4(15.4)	18 (69.2)	26
20 RIO DE J.	0 (0.0)	1(14.3)	6 (85.7)	7
21 LIMA	0 (0.0)	17(45.9)	20 (54.1)	37
22 SYDNEY	1 (3.1)	11(34.4)	20 (62.5)	32
計	53(10.9)	93(19.1)	342 (70.1)	488(100.0)

1. 日本と同じように過している、2. 現地の習慣にあわせている、3. 休暇・休養にあてている、の3つであった。その結果は表27に示した。この結果からは、いずれの都市においても、正月は休暇・休養にあてているという回答が圧倒的に多く、都市による差は見られなかった。

6. 第6グループ：駐在員の心情

Q24 においては、赴任地での緊張感について質問した。回答選択肢は、1. たいへん緊張している、2. 緊張している、3. 緊張していない、4. まったく緊張していない、の4つである。結果の処理に際しては、1と2を「緊張している」のカテゴリーとし、3と4を「緊張していない」のカテゴリーとして、この両者間の検定をおこなったのが、表15の Q24 欄である。この結果、「緊張している」と答えた人数が有意に多い

都市は、ラゴスのみである。それに対して、「緊張していない」と答えたものが有意に多い都市は、ストックホルム、トロント、シドニーの3都市であった。

Q31 においては、駐在員として誇りを感じているかを質問した。回答選択肢は、1.たいへん誇りに思っている、2.誇りに思っている、3.それほど誇りに思っていない、4.まったく誇りに思っていない、の4つであった。結果の処理に関しては、1と2を「誇りに思う」のカテゴリーとした。また、3と4を「誇りに思わない」のカテゴリーとして、この両者の間の検定をおこなったのが、表15の Q31 欄である。この結果、「誇りに思わない」と答えたものが、有意に多かったのは、ソウル、バンコク、ジャカルタ、カイロ、アルジェ、ラゴス、ナイロビ、リマの都市であった。その他は、「誇りに思う」と答えた者の数と、「誇りに思わない」と答えた者の数との間に有意差は見られなかった。

Q32 においては、駐在員は現地の文化に同化すべきであるという考え方に対する意見を問うた。回答選択肢は、1.まったくそう思う、2.そう思う、3.そう思わない、4.ぜんぜんそう思わない、の4つであった。結果の整理に際しては、1と2をまとめて、「そう思う」のグループとし、3と4をまとめて、「そう思わない」のグループとした。そして、この両者間の検定をおこなった結果が、表15の Q32 欄である。その結果から、現地の文化への同化が必要だと答えた者が、有意に多かった都市は、ロンドン、パリ、ミラノ、トロント、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンパウロ、リオデジャネイロ、リマ、シドニーであった。それに対して、現地の文化に同化する必要があるという意見に、「そう思わない」と答えた者の数が有意に多かった都市はなかった。

Q27 においては、もし、子供がこの国の人と結婚したいと言ったとき、相手の人との文化の違いにこだわるか、を質問した。回答選択肢は、1.まったくこだわらない、2.こだわらない、3.こだわる、4.たいへんこだわる、の4つである。結果の整理において、1と2をひとつにして、「こだわらない」のグループとし、3と4をひとつにして、「こだわる」のグループとした。そして、この両者の間を検定した結果が、表15の Q27 欄である。この結果から、「こだわる」と答えた者が有意に多かった都市は、ソウル、バンコク、ダッカ、カラチ、ロンドン、ミラノ、カイロ、アルジェ、ラゴス、ニューヨーク、リマであった。他の都市においては、「こだわらない」と答えた者の数と「こだわる」と答えた者の数の間に、有意な差はなかった。

Q33 において、今後5年間、この国に居つづけたいかを質問した。回答選択肢は、1.まったくそう思う、2.そう思う、3.そう思わない、4.まったくそう思わない、の4つであった。結果の整理に際しては、1と2をひとつにして、「そう思う」のグループ

とし、3と4をひとつにして、「そう思わない」のグループとした。そして、その両者間の検定をおこなった結果が、表15の Q33 欄である。この結果から、この国に、5年間居つづけたいとは思わないと答えた者の数が有意に多い都市は、ソウル、バンコク、ダッカ、カラチ、テヘラン、ストックホルム、カイロ、アルジェ、ラゴス、ナイロビ、リマであった。その他の都市では、5年間居つづけたいとするカテゴリと、居つづけたくないとするカテゴリの間には、有意な差は認められなかった。

これら5つの質問項目は、駐在員の心情とでもよべるものであろう。これらの項目を見ると、Q24の現地での緊張感を問うた項目においては、ラゴスをのぞいて、駐在員が生活していく上で、緊張を示している者が多い都市はない。しかしラゴスにおいては、23対3の割合で、駐在員が緊張を示している。それに対して、シドニーでは、8対24の割合で緊張を示していないと答えた者が多かった。

Q31で、駐在員であることに誇りを感じてないと答えた者が多かった都市は、6都市であるが、これらは、リマをのぞいて、アジア、アフリカの都市であった。その他の地域では有意差は認められなかった。駐在員であることを誇りに思っていると答えた者が有意に多い都市はなかった。しかし、誇りを持ってないことに関しては、赴任地との関係が認められるようである。

Q32における現地への同化は必要かに関する項目においては、必要がないと答えた者の数が有意に多かった都市はなかった。それに対して、ロンドンやパリ、ミラノといったヨーロッパの都市に駐在する者には、現地文化への同化の必要性を説くものが多かった。しかし、同じヨーロッパであっても、ストックホルムの駐在員の間では、かならずしもその傾向が見られない。北アメリカ、南アメリカの都市とシドニーの駐在員にも現地文化との同化を計るべきだとする考えをもつ者が多い。

それでは、駐在員として、現地の文化に同化すべきか、という項目と、今後5年間この国に居つづけたいか、という項目間でクロス集計をおこなったのが、表28である。この結果から、今後5年間住みつづけることに関しては、そう思うものと思わぬものが相半ばするが、現地の文化には同化するべきだと答えた者が多かった都市は、ロンドン、パリ、ミラノ、トロント、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンパウロ、リオデジャネイロ、シドニーの各都市であった。これらの都市が、いわゆる駐在員にとって、住み心地のよい都市ということになる。

これに対して、今後5年間は居つづけたくはなく、現地の文化に同化することにも賛否相半ばする傾向を示しているのは、ソウル、バンコク、ダッカ、カラチ、テヘラン、ストックホルム、カイロ、アルジェ、ラゴス、ナイロビの都市であった。そして、

これらの都市は、ストックホルムをのぞいて、アジア、アフリカ諸国の都市である。なぜ、このグループに、ストックホルムが入るのかは、興味ある現象である。

Q33 の今後5年間この国に住みたいか、という項目は、いうなれば、駐在員自身の短期間の心情であろう。それに対して、Q27 の子供の結婚にこだわるかは、もっと長い期間にわたって、その国の文化とつき合うとしたときの心情とみることができらるであろう。この2つの項目について、クロス集計をおこなったのが、表29である。そしてその結果を見ると、子供の結婚に対してこだわりを感じ、自分自身の滞在が5年つづくことに抵抗を示しているのは、ソウル、バンコク、ダッカ、カラチ、カイロ、

表28 Q32×Q33

		Q33 今後5年間、この国に住みたいか		
		1 居たい	2 有意差なし	3 居たくない
Q32 「現地へ同化すべきだ」という意見に対して	1 そう思う		LONDON PARIS MILANO TORONTO NEW YORK LOS ANGELES SÃO PAULO RIO DE J. SYDNEY	LIMA
	2 有意差なし		JAKARTA MADRID	SEOUL BANGKOK DACCA KARACHI TEHERAN STOCKHOLM CAIRO ALGER LAGOS NAIROBI
	3 そう思わない			

アルジェ、ラゴス、リマの8都市であった。これらの8都市は、いうならば、日本人にとって、その文化接触の上で大きな抵抗感をもつ国ぐにであるといえることができる。ソウル、バンコクは数多くの日本人が居住しているが、相手国は対日感情は決して暖かいものではない。また、ダッカ、カラチ、カイロ、アルジェ、ラゴスは日本人に対して、なじみの少ない国ぐにといわなければならない。

これらの都市のうち、とくに目立つのは、それぞれの項目に対してラゴス駐在員の示す回答に、否定的態度が多く見うけられたことである。ラゴスはナイジェリアの首都であり、最近石油の産出が増加してからはインフレが進み、町には自動車があふれ、人心が荒廃していると語る人が多い。その意味で、ラゴスが日本人駐在員にとって、住みづらい町であると映っているようである。

表29 Q27×Q33

		Q33 今後5年間、この国に居たいか		
		1居たい	2有意差なし	3居たくない
Q27 子供がこの国の人と結婚することに対して	1 こだわらない			
	2 有意差なし		JAKARTA PARIS MADRID TORONTO LOS ANGELES SÃO PAULO RIO DE J. SYDNEY	TEHERAN STOCKHOLM NAIROBI
	3 こだわる		LONDON MILANO NEW YORK	SEOUL BANGKOK DACCA KARACHI CAIRO ALGER LAGOS LIMA

Ⅳ. 全体的考察

これまでに得られた結果を、より総合的に解釈するために、表15の各項目の有意差検定の結果のうちからいくつかの組合せを選び、都市間の反応パターンの類似性をクラスタ分析によって検討をおこなった。

クラスタ分析の結果を樹状図（デンドログラム）の形に表現したのが、図3、4である。図において、縦方向の尺度は反応パターン間の距離（類似性の逆の指標）に比例している。個々の都市から類似性の強いもの同士を順に結びつけて、クラスタを形成して行く過程が示されている。たとえば、図3においてシドニーとトロントの反応パターン間の距離は0、すなわち全く同一の反応パターンを示していることがわかる。また、類似性の閾値を下げるに従って次第に大きなクラスタ（図3の場合は2つの主要なクラスタ）にまとまって行くことがわかる。

まずはじめのクラスタ分析の対象として選んだ項目群は、駐在員が現地社会をどのように見ているかを反映するような項目である。具体的には、Q13 現地の人との付き合い、Q19 現地の人とのパーティー、Q21 日常生活での言葉、Q24 緊張感、Q27 子どもの結婚、Q31 駐在員としての誇り、Q32 現地文化への同化、Q33 今後5年間この国に居つづけたいか、の8項目である。

クラスタ分析の結果、22の都市は、大きく2つのクラスタにわかれた。図3を見ると、第1のクラスタは、パリ、ストックホルム、リオデジャネイロ、マドリー

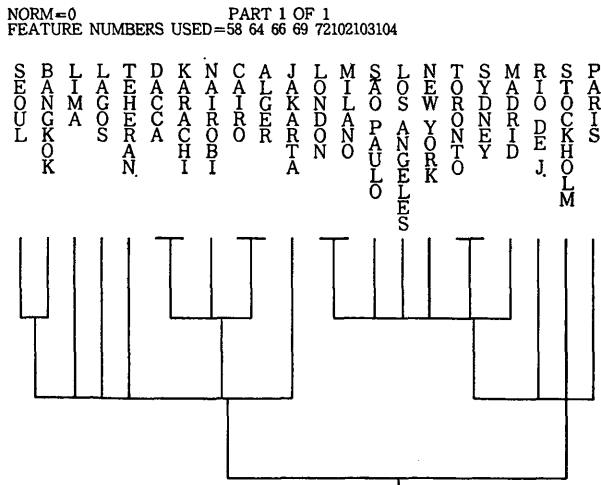


図3 駐在員が現地社会をどのように見ているかのクラスタ分析

NORM=0 PART 1 OF 1
 FEATURE NUMBERS USED=75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93
 94 95 96 97 98 99100101

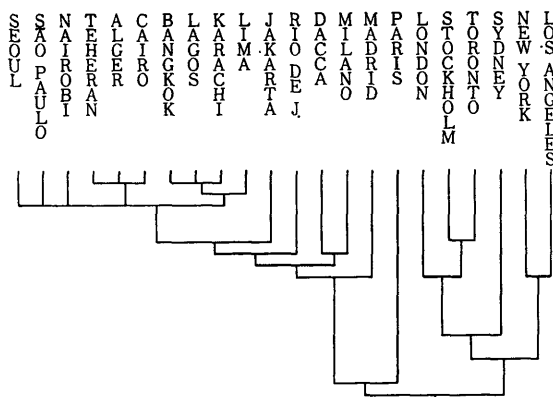


図4 文化比較に関する項目についてのクラスター分析

ド、シドニー、トロント、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンパウロ、ミラノ、ロンドンの11都市である。

第2のクラスターを形成しているのは、ジャカルタ、アルジェ、カイロ、ナイロビ、カラチ、ダッカ、テヘラン、ラゴス、リマ、バンコク、ソウルの11都市である。

この2つのクラスターを見ると、第1クラスターに属する都市は、ヨーロッパ、南・北アメリカの都市である。

それに対して、第2クラスターを形成している都市は、すべて、アジア、アフリカの都市である。このことは、駐在員がどの都市に駐在するかによって、現地社会に対する見方が異なっていることを実証している。

このデータをよりこまかなレベルで検討すると、大変興味深い事実がわかる。すなわち、シドニーとトロント、ミラノとロンドン、アルジェとカイロ、カラチとダッカといった都市の対は、それぞれ地理的に異なっていながら、この対になる都市に住む駐在員は、現地社会に対して、同じような見方をしているといえる。いうなれば、これらの対となっている都市は、われわれ日本人から、大変類似度の高い都市であると映っているのである。

つぎに、Q30のそれぞれの生活の側面における文化比較に関する一連の項目群を選び、クラスター分析をおこなったのが図4である。Q30の項目に関しては、第5グループの結果の整理の個所を参照されたい。

この結果から、22の都市は、パリをのぞいて大きく2つのクラスターにわかれる。第1のクラスターを形成しているのは、ロサンゼルス、ニューヨーク、シドニー、ト

ロント、ストックホルム、ロンドン、の6都市である。第2のクラスターは、マドリード、ミラノ、ダッカ、リオデジャネイロ、ジャカルタ、リマ、カラチ、ラゴス、バンコク、カイロ、アルジェ、テヘラン、ナイロビ、サンパウロ、ソウルの15都市である。この結果をみると、生活の諸側面を日本と比較したとき、いわゆる先進国のクラスターと、それ以外のクラスターが抽出されている。このことは、図2における結果と整合するものである。

これらの結果を総合的に見ると、日本人の異文化にかかわる際のいくつかの問題点を指摘することができる。

まず第1点は、海外駐在員が、文化接触を通じてとまどっているのは、ヨーロッパではなく、アジア、アフリカの国々にであるということである。かねてから、日本はアジアの中に位置し、同じような気候風土の中に置かれて、アジア的世界は、日本人にとって、大変親しみのある、理解しやすい国々にであると、ともすれば考えられていた。しかし、今回のわれわれの調査では、日本の企業の海外駐在員が、平均的な日本人の中から抽出された人びとと考えるならば、その人びとが、文化的なとまどいを示しているのは、同類と考えられていたアジアの国々にであったということは、大変興味を引く点である。

それに対して、ヨーロッパや北アメリカの国々に対する文化的抵抗は少ない。とくに、顕著な例として、Q32において、現地の文化に同化することについての項目で、肯定的意見が多数を占めた都市が、ロンドン、パリ、ミラノ、トロント、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンパウロ、リオデジャネイロ、シドニーであり、アジア、アフリカの国々にの駐在員は、決してこの意見に肯定を示さなかった。

このような結果から考えられるひとつの結論は、われわれの今日的な文化状況が、やはりヨーロッパ、北アメリカ的であるということである。日本人にとって、ヨーロッパ、北アメリカの文化には、とまどいを感じないが、アジア、アフリカの世界には、とまどいを感じているのである。この2つの世界区分の中で、日本の置かれている位置が、これらの意識調査を通じて、明らかにされたことができよう。

第2点は、海外駐在員の多くが、強く日本社会への早期復帰を望んでいる点である。このことは、今後5年間この国に居つづけたいと思うかという項目に対して、肯定が多数を示した都市がひとつもなかったことから、そのことがうかがえる。それとともに、子供が現地の人と結婚することに、かなり強いこだわりが表明された。

このことに限らず、かねてから指摘されていること¹⁾に、日本人の集団主義的傾向がある。日本人のこのような集団主義的傾向が良いか悪いかは別問題として、日本人

が集団から疎外されると、その集団外に置かれた個人が、たえがたい苦痛を味わうことは事実である。この事実に対して、ヨーロッパ人やアメリカ人は、一人で置かれるような状況にもよくたえるので、日本人もたえなければならぬと議論することは、この問題に対して有効な指針を示したことにはならないであろう。今日においても、日本社会は集団主義的なやり方で営まれており、またそれが相当の成功をおさめているので、このような集団主義的なやり方は、今後もつづくであろう。このような文化の中で育ってきた日本人が、海外においても、結集し群れをなして行動することは、いたし方のないことであろう。むしろこのような集団主義的な中で育ってきた日本人に対して、個人主義的に振舞えということが、文化摩擦のもとでの不適応の原因となっているのであろう。

第3に、海外駐在員の大きな悩みが、子供の教育問題にあり、高等教育は、ぜひ日本で受けさせたいという希望がつよい。すなわち、日本社会は、まぎれもなく学歴社会であり、その学歴社会での昇進のためには、日本のしかるべき大学を卒業する必要がある。そのしかるべき大学に入学するためには、相当の高等学校に入学する必要がある。そのためには、中学校までは現地の学校に通わせるが、高校以後は、日本に帰国させて勉強させるという現状認識を示しているのであろう。それとともに、子供の発達段階の中で、日本文化へのアイデンティティを育成させるには、ある年齢までに、日本社会に復帰させた方がよいという経験的法則があるようである。星野は、いわゆる戦後の引揚者の子供が、つねに日本社会に対して、一枚、膜を通してしかアイデンティティを感じることをできないことを紹介している [星野 1980]。今日、帰国子弟の教育が、ひとつの問題となってその対策が考慮されているが、これらの子弟の問題は、今後一層、その研究の緊急度を増していくであろう [河合・藤縄 1980; 小林 1980]。

これらの結果を総合してみると、日本人が海外で生活していくときには、ある種の文化的セットが必要であるらしいことが、うかがえる。

すなわち、海外の日本人は、おたがいに依存関係を保っている。それとともに、日本社会は便利な社会であることを認めていて、それらの物質文化をそれぞれの赴任地でも再現しようと努力している。そしてまた、日本社会の教育水準が、どの国よりも高いことを認めており、そのために、子供の高等教育について腐心している。

これらのことを要約すれば、日本人が海外で暮していくためには、あるまとまりをもった日本人社会と、日本的物質文化と、子弟のための教育的配慮が必要であるということである。この3つは、いうなれば、日本社会の縮図を、赴任地につくることであ

り、これがどの程度充足されているかによって、赴任地の住み心地が決まるようである。そして、ヨーロッパや北アメリカでは、これらの3つの要件が、かなりの程度満たされており、日本人にとって住み心地のよい社会となっているのであろう。

海外で生活している日本人駐在員は、異なる文化の中で、日々、文化摩擦を経験している。そしてその結果、日本人同士が群れをなし、日本の生活用品を持ち込み、日本語を話して現地文化と溶け込まないといわれている。そしてこれが原因となって、現地の人びとの反撥をまねき、排日的な運動となる場合も、過去には存在した。

しかし、これを文化の問題と考えるならば、それぞれの国には、その国固有の文化がある。あらゆる文化は、なにか不透明な膜でおおわれたような存在であるとレヴィ＝ストロースは述べている [1980年3月14日、シンポジウム「日本の主張」にて]。それと同時に、その膜の内部に、異物としての異なる文化が侵入したとき、生命力の強い文化であればあるほど、その異物を排除しようとするであろう。いうなれば、これが文化の自浄作用ともよばれるべきものである。この種の文化的葛藤こそが、逆に文化に活力を与える根源である。文化的衝突をおそれて、文化的接触を避けることは、ばかげたことである。駐在員という、日本社会のある意味での平均的日本人が異文化と遭遇することが、結果として、相手国と日本の文化に活力を与えることになるであろう。

謝 辞

本研究は、国立民族学博物館の共同研究班「海外における日本人の文化変容」の研究成果の一部である。また同時に、この研究に関しては、サントリー文化財団から、『日本文化の変容過程——異なる文化との遭遇——』の研究題目のもとに、研究助成をうけた。ここに感謝の意を表したい。

また本研究の調査については、日本貿易振興会 (JETRO) の海外 PR 課を通じ、JETRO の海外支社の方にご協力を賜った。調査の手配等に関して、多大のご援助を賜った、日本貿易振興会 海外 PR 部 PR 1 課課長代理 西田宗旦氏に厚くお礼を申し述べる次第である。

先に述べたように、本研究は、共同研究班においてなされたものである。本報告についていえば、調査紙の作製に関しては、共同研究班の全員の総意によるものである。しかし、調査結果の分析、考察に関しては、栗田、八村の責任においておこなわれたものであることを明記したい。

文 献

星野 命

1979 「心理学における異文化間研究＝異文化間心理学の特質と課題」『心理学評論』22 (3) : 214-235。

- 1980 「概説・カルチャー・ショック」『現代のエスプリ』161:5-30。
- 星野 命編
1980 「帰ってきた私たち——帰国学生の自叙伝から」『現代のエスプリ』161:223-228。
- 稲村 博
1979 「人格力動・精神病理の異文化間研究——日本人が「固まる」ことの考察——」『心理学評論』22(3):319-331。
1980 『日本人の海外不適應』日本放送出版協会。
- 岩原信九郎
1955 『新しい教育・心理統計 ノンパラメトリック法』日本文化科学社。
1958 『新訂版 教育と心理のための推計学』日本文化科学社。
- 柏木恵子
1979 「社会的学習としての発達文化差とその要因」『心理学評論』22(3):278-294。
- 河合隼雄・藤縄真理子
1980 「在外日本人の適応・不適應についての臨床心理学的調査」『現代のエスプリ』161:102-119 (1979『海外帰国子女教育研究Ⅴ』中間報告)。
- 菊池章夫
1979 「異文化間研究の方法と問題点」『心理学評論』22(3):236-246。
- 小林哲也
1980 「海外帰国子女の適応」『現代のエスプリ』161:83-101。
- 松浦敬紀・俵 実男・岡田雄次・唐崎伊久里
1980 「海外駐在員1,000人の生活と意見」『トレードピア』122(11):6-16。
- 箕浦康子
1979 「心理人類学と異文化間心理学」『心理学評論』22(3):332-347。
- 宮本美沙子
1979 「動機づけ・感情の異文化間研究」『心理学評論』22(3):295-305。
- 清水弘司
1979 「性差・性行動の異文化間研究」『心理学評論』22(3):306-318。
- 詫摩武俊・星野 命・柏木恵子
1979 「Cross-cultural Research のまとめと展望」『心理学評論』22(3):348-365。
- 渡辺文夫・大塚啓輔
1979 「日本における異文化間心理学の研究動向(1960~1979)」『心理学評論』22(3):247-277。

巻末資料 調査票

調査票の記入について

- この調査では、いわゆる海外駐在員の方がたや、そのご家族の方を対象としておりますが、年齢や性別によって、文化の受けとめ方が異なると思われまますので、ご夫妻べつべつに、この調査票にご回答いただきたいと思います。回答は回答欄に記入されるか、または、当該する番号をマルでかこんでください。
- この調査に回答される方のお名前をご記入下さい。

氏名	(年令 才)	1男・2女
出生地	都道府県	市町

- 次頁以下の質問項目には、上にお名前を記入された方が、ほかの誰とも相談されずに回答して下さい。

F.1 同居のご家族について、お書き下さい。

これには同居の友人も含めます。すでにご夫妻のいずれかが、この家族表を記入されている場合はF.1 F.2 を、とばして下さい。

続柄	氏名	年令	職業(できるだけ詳しく)	最終学歴または所属学校名(日本人学校も含む)	年 収 万円

F.2 日本に残しておられる子供があれば、ご記入下さい。

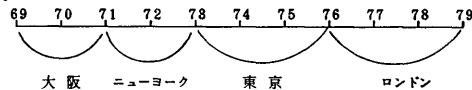
続柄	氏名	年令	職 業	最終学歴または所属学校	未婚または既婚	寄宿先

Q 1. 現在居住しておられる国に來られてから、通算、何年になりますか。

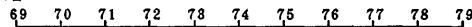
(年 月)

Q 2. 現在の駐在地以前、10年間の居住歴をお聞かせ下さい。

例



回答



Q 3. 最近、日本に一時帰国されたのはいつですか。

(年 月 日本に居た期間 カ月 週間)

Q 4. 住居について、お聞かせ下さい。

現在のあなたのお住いは

1. 一戸建 (1. 持ち家 2. 借家 3. 社宅 4. その他 ())
2. アパート (1. 分譲 2. 賃貸 3. 社宅 4. その他 ())
3. 下宿 (ペンションを含む)
4. その他 ()

Q 5. 日本でのあなたのお住いは

1. 一戸建 (1. 持ち家 2. 借家 3. 社宅 4. その他 ())
2. アパート (1. 分譲 2. 賃貸 3. 社宅 4. その他 ())

3. 下宿 (ペンションを含む)

4. その他 ()

Q 6. あなたの家庭では、日本人以外の現地の人を使用人として雇っていますか。

1. はい
2. いいえ

人数 ()

職種 (1)

(2)

(3)

(4)

(5)

Q 7. 言葉について

家庭の中では、もっぱら何語を話していますか ()

近所の方とは、もっぱら何語を話していますか ()

事務所では、もっぱら何語を話していますか (職業をお持ちでない場合は、けっこうです。) ()

Q 8. 日頃の生活の上で、おつきあいのあるのは、どんな人たちですか。

1. ほとんど現地の人である。
2. ほとんど日本人である。
3. ほとんど、現地の人でもなく、日本人でもない、それ以外の国の人たちである。
4. ほとんど日系人 (二世、三世) などである。

Q 9. この国で生活していく上で、今でも日本から取りよせておられるものは何ですか。

また、できれば、取りよせたいと考えておられるものは何ですか。

各項目のうちの()の中に、回答選択肢の番号を選んで記入して下さい。

回答選択肢

1. 日本から送らせたり、現地の日本品店を通じて取りよせている。
2. できれば取りよせたい。
3. 現地のものを用いている。
4. 必要でない。

- | | | | |
|----------------|-----|---------------------|-----|
| 1. 米 | () | 22. 男性用下着 | () |
| 2. 味噌 | () | 23. 女性用下着 | () |
| 3. 醤油 | () | 24. 紳士靴 | () |
| 4. のり | () | 25. 婦人靴 | () |
| 5. つけもの | () | 26. 日本の新聞 | () |
| 6. お茶 | () | 27. 雑誌の類 | () |
| 7. うめぼし | () | 28. 子供の本(絵本・マンガ・雑誌) | () |
| 8. しいたけ | () | 29. 歌謡曲のテープ | () |
| 9. インスタント・ラーメン | () | 30. テレビ番組のビデオ・テープ | () |
| 10. カレー粉 | () | 31. 赤ちゃん用品 | () |
| 11. わさび | () | 32. 台所用品 | () |
| 12. 日本酒 | () | 33. くすり | () |
| 13. 酒のつまみ | () | 34. 自動車 | () |
| 14. おかき | () | 35. 冷蔵庫 | () |
| 15. ダシの素 | () | 36. 洗濯機 | () |
| 16. カンピョウ | () | 37. テレビ・ラジオ | () |
| 17. もち | () | 38. ステレオ | () |
| 18. その他の日本食 | () | 39. 掃除機 | () |
| 19. めがね | () | 40. 化粧品 | () |
| 20. 男性用スーツ | () | 41. 生理用品 | () |
| 21. 女性用スーツ | () | 42. 避妊具 | () |

Q10 あなたは正月をどのように過ごしていますか。

- 1 日本と同じように過ごしている
- 2 現地の習慣にあわせている
- 3 休暇・休養にあてている

Q11 あなたは、現在の住いで、次の項目に関して、どのような印象をお持ちですか。

	しま いた く 不便	不 便 さ し て	不 便 し て い る	し ま た く 不 便
1 西洋便所を使うことについて	1	2	3	4
2 飲み水について	1	2	3	4
3 西洋風呂を使うことについて	1	2	3	4
4 あなたの住いの広さについて	1	2	3	4
5 あなたの住いの設備について	1	2	3	4
6 あなたの住いの間取りについて	1	2	3	4
7 ベッドに寝ることについて	1	2	3	4
8 椅子の生活について	1	2	3	4
9 家の中で靴をはいている暮しについて	1	2	3	4
10 家庭電化製品の入手について	1	2	3	4
11 収納・押入れについて	1	2	3	4
12 あなたの住いの家賃について	1	2	3	4

1 2 3 4
 と
 思
 う
 安
 い
 思
 う
 高
 い
 思
 う

Q12 あなたは、あなたの住いの持ち主とのつき合いを、どのように感じておられますか。

- 1 たいへんよい関係だ
- 2 よい関係だ
- 3 わずらわしい
- 4 たいへんわずらわしい

Q13 日本人以外の現地の人とのつきあいについて、どのような印象を持っておられますか。

- 1 たいへん楽しい
- 2 楽しい
- 3 わずらわしい
- 4 たいへんわずらわしい

Q14 あなたのお住いの近くには、日本人が居ますか。

- 1 たいへん多い
- 2 多い方である
- 3 あまり居ない
- 4 まったくない

Q15 日本人とのつき合いについて、どのような印象を持っておられますか。

- 1 できるだけつき合いたいと思う
- 2 つきあいたいと思う
- 3 あまりつき合いたいとは思わない
- 4 まったくつき合いたいとは思わない

Q 1 6. 日本人会に参加していますか。

1. はい 2. いいえ

Q 1 7. 日本大使館主催の集まりに参加しますか。

1. はい 2. ときどき 3. いいえ

Q 1 8. 日本からのお客の接待について、どう思われますか。

1. たいへん楽しい
2. 楽しい
3. わずらわしい
4. たいへんわずらわしい

Q 1 9. 現地の人や外国人をまじえたパーティに出席したとき、あなたはいつものような印象を持ちますか。

1. たいへん楽しい
2. 楽しい
3. わずらわしい
4. たいへんわずらわしい

Q 2 0. あなたの会社の同僚、またはその家族とのつき合いについて、どのような意見をお持ちですか。

1. ひじょうに大切だと思う
2. 大切だと思う
3. 大切だとは思わない
4. ぜんぜん大切だとは思わない

Q 2 1. あなたは、日頃の生活の中で、言葉について、不自由されていますか。

1. まったく不自由していない
2. 不自由していない
3. 不自由している
4. まったく不自由している

Q 2 2. 現地語の新聞を読んでいますか。

1. 毎日読んでいる
2. ときどき読んでいる
3. ほとんど読まない
4. まったく読まない

Q 2 3. 現地のテレビ・ラジオを見たり聞いたりしていますか。

1. 毎日視聴している
2. ときどき視聴している
3. ほとんど視聴していない
4. まったく視聴していない

Q 2 4. 現在のあなたは、現地で暮していく上で、どのような感じを持っていますか。

1. たいへん緊張している
2. 緊張している
3. 緊張していない
4. まったく緊張していない

Q 2 5. あなたの子供は、どの程度まで現地の学校で学ばせたいとお考えですか。

1. 大学まで
2. 高等学校まで
3. 中学校まで
4. 小学校まで
5. 子供は、日本で教育したい

Q 2 6. あなたの子供の交友範囲はどのようにさせたいと思いますか。

1. なるべく現地の子供と遊ばせたい
2. なるべく日本人の子供と遊ばせたい
3. 子供の自由にしている

Q 2 7. もし、あなたの子供が「この国の人と結婚したい」と云ったとき、相手の人との文化の違いにこだわりますか。

1. まったくこだわらない
2. こだわらない
3. こだわる
4. たいへんこだわる

Q 2 8. あなたの子供が、外国で教育をうけておられるとした場合、そのことが、その子供が将来日本の社会で活躍するとき、不利になるとお考えですか。

1. まったくそう思う
2. そう思う

3. そう思わない
4. まったくそう思わない

Q 2 9. 海外においても、子供のための塾（勉強塾）は、あった方がよいと思いますか。

1. ぜひ必要だ
2. 必要だ
3. 必要ではない
4. ぜんぜん必要ではない

Q 3 0. あなたが現在おられるこの国の一般的事情と日本のそれとを比較して、つぎの項目について、どのように感じておられますか。

各項目のうしろの()の中に、回答選択肢の番号を選んで答えて下さい。

回答選択肢

- | | | |
|-----------------|----------------|--|
| 1. 日本の方がずっと良い | | |
| 2. 日本の方が良い | | |
| 3. どちらが良いかわからない | | |
| 4. この国の方がよい | | |
| 5. この国の方がずっと良い | | |
| 1. 公衆道徳 () | 6. 町の清潔さ () | |
| 2. 消費生活の豊さ () | 7. 政治的安定 () | |
| 3. 家族のむすびつき () | 8. 泥濘などの治安 () | |
| 4. 性風俗 () | 9. 気候 () | |
| 5. 若い人のしつけ () | 10. 生活の便利さ () | |

11. 教育環境	()	20. 店員の接客態度	()
12. 教育水準	()	21. 商店の正札販売	()
13. 金銭観	()	22. 商店での買いやすさ	()
14. 労働態度	()	23. 図書館・劇場などの 文化施設の充実	()
15. 約束を守る	()	24. 都市交通の便利よさ	()
16. 親切心	()	25. チップの制度	()
17. 自動車の運転マナー	()	26. 町並の美しさ	()
18. 電話の便利よさ	()	27. 公園・自然などの美 しさ	()
19. 医療保険制度	()		

Q 8 3. 最後に、あなたは、今後この国に5年間居つづけたいと思いますか。

1. まったくそう思う
2. そう思う
3. そう思わない
4. まったくそう思わない

ご協力 ありがとうございます。

Q 8 1. 駐在員あるいは駐在員の家族として、この国で暮しておられること、どのような感じをお持ちですか。

1. たいへん誇りに思っている
2. 誇りに思っている
- 3.それほど誇りには思っていない
4. まったく誇りには思っていない

Q 8 2. 「海外駐在員の心がまえとして、現地の生活や文化に同化しなければならぬ。」という考え方に対して、あなたは、どのような意見をお持ちですか。

1. まったく、そう思う
2. そう思う
3. そう思わない
4. ぜんぜんそう思わない